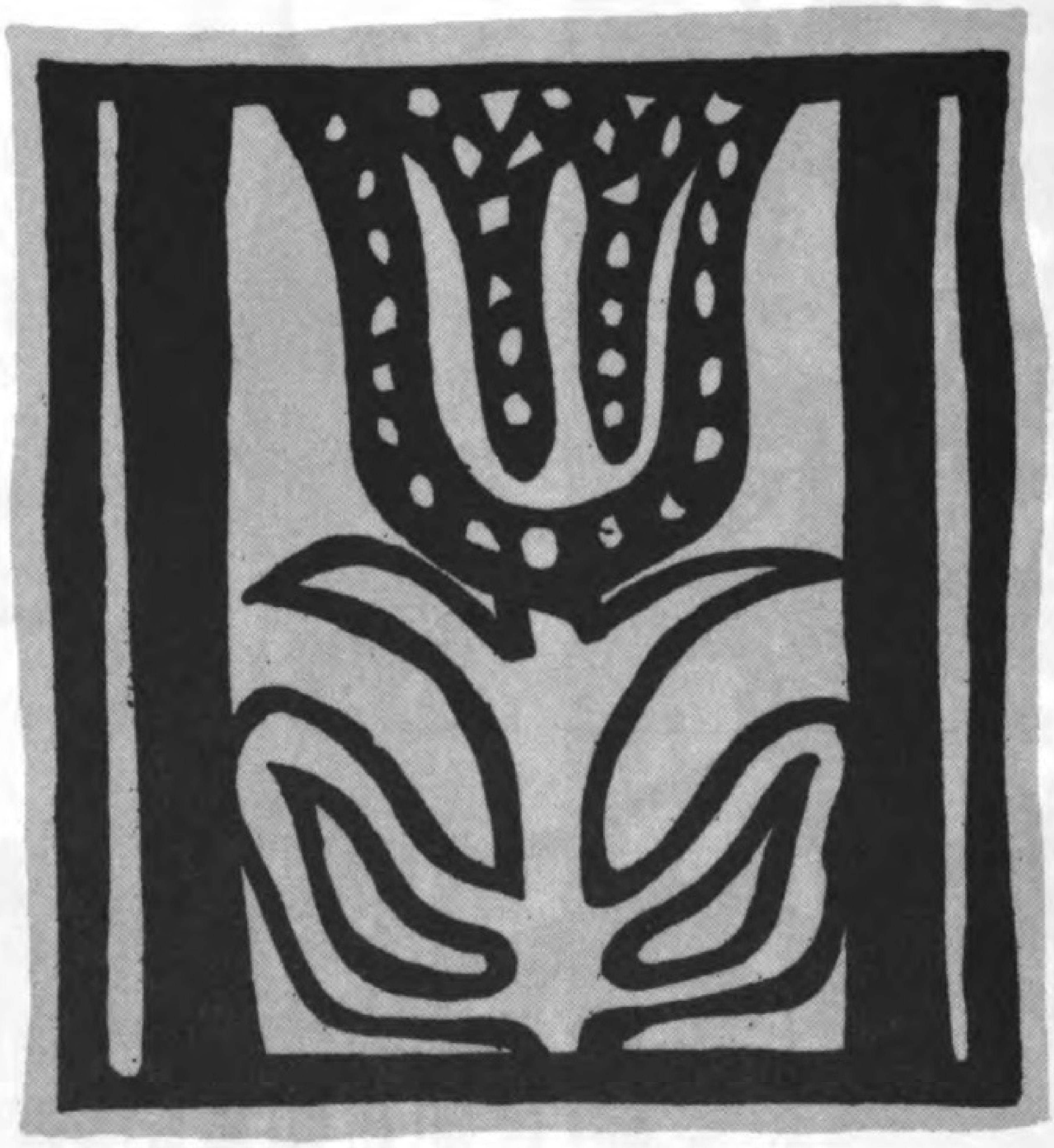
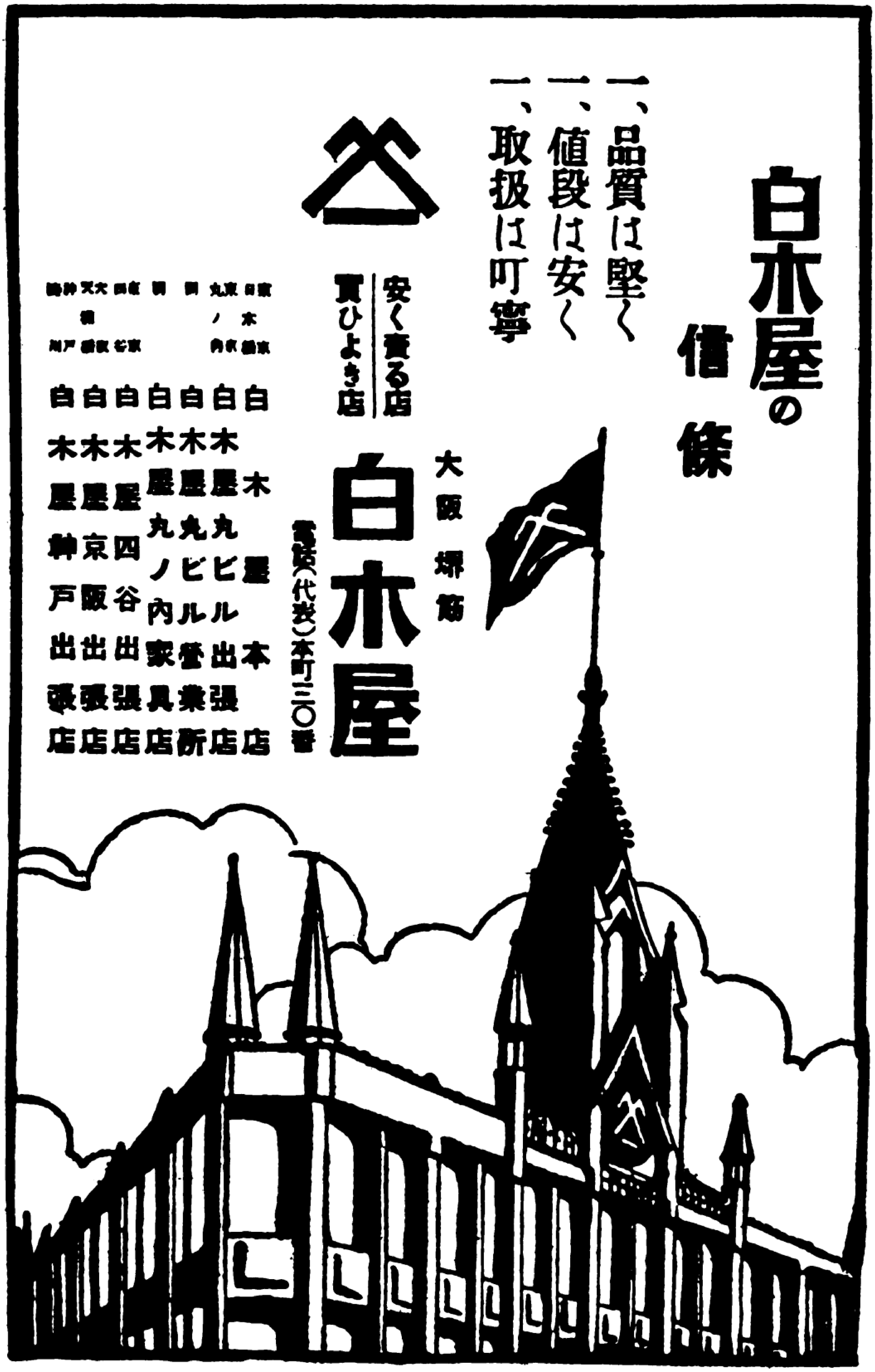
第四卷五月號

婦人運動



職業婦人社發行

大正十三年十一月廿二日第三種郵便物認可
大正十五年四月二十七日印刷納本 五月一日發行 （每月一回一日發行）


白木屋の信條
一、品質は堅く
一、値段は安く
一、取扱は叮寧
安く賣る店
買ひよき店
大阪堺筋
白木屋
電話(代表)本町三〇番
白木屋本店
白木屋丸ビル出張店
白木屋丸ビル營業所
白木屋丸ノ内家具店
白木屋四谷出張店
白木屋京阪出張店
白木屋神戸出張店

解放群書

(1)

新居格

著署
校幀

◇四六版　定價壹圓
◇二百頁　送代拾錢

月夜の喫煙

◎サロンの麗人も卷を措く能はざる無產階級最初の純藝術品

◎近代的女性を銳敏に觸知し描寫したる劃時代的の新創作集

著者が著者であり、發行所が發行所であるが故に輕斷しないで呉れ。―著者の清新なる表現、輕快なる機智は新社會の原理を暗示しながら、しかもサロンの麗人をも喜んで聽從させるであらう。これこそ日本の無產階級が產んだ最初の醇乎たる藝術品と云へる。

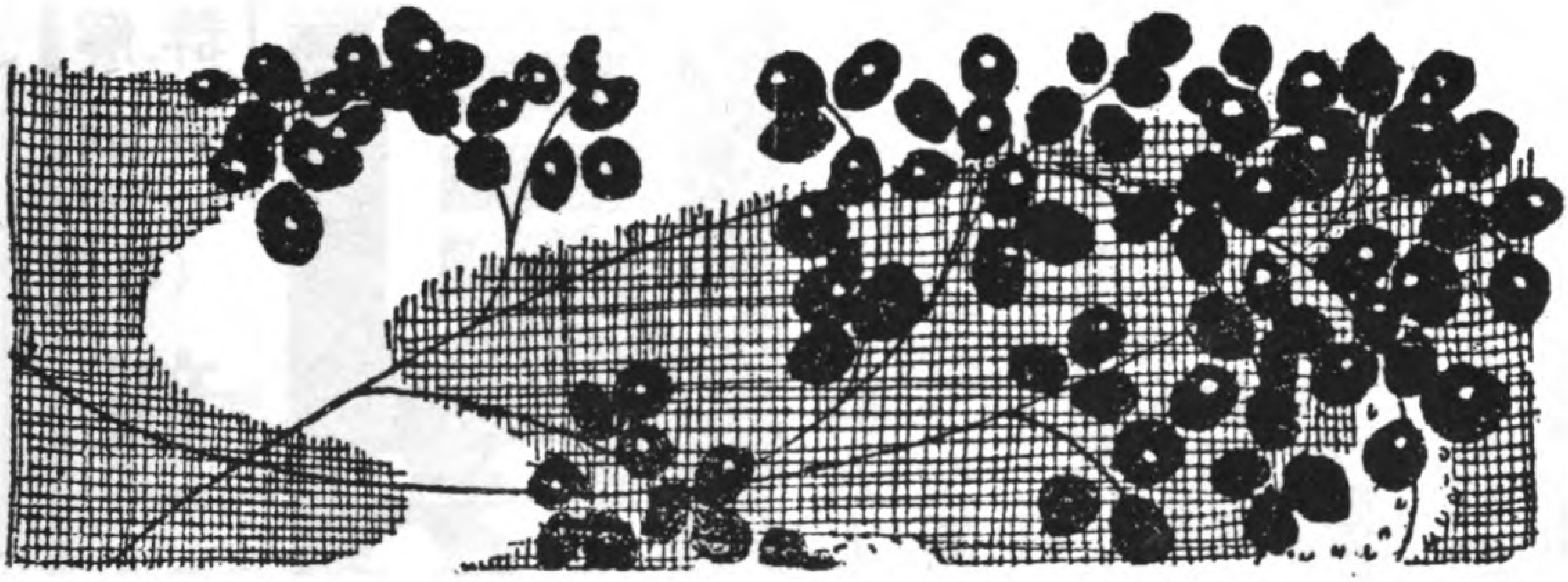
著者は本書に收むる所の諸作品に於て、現代資本主義文化爛熟期の特產たる、近代的女性を敏感に觸知してその典型を誰よりも早くそして極めて鮮かに描出してゐる。

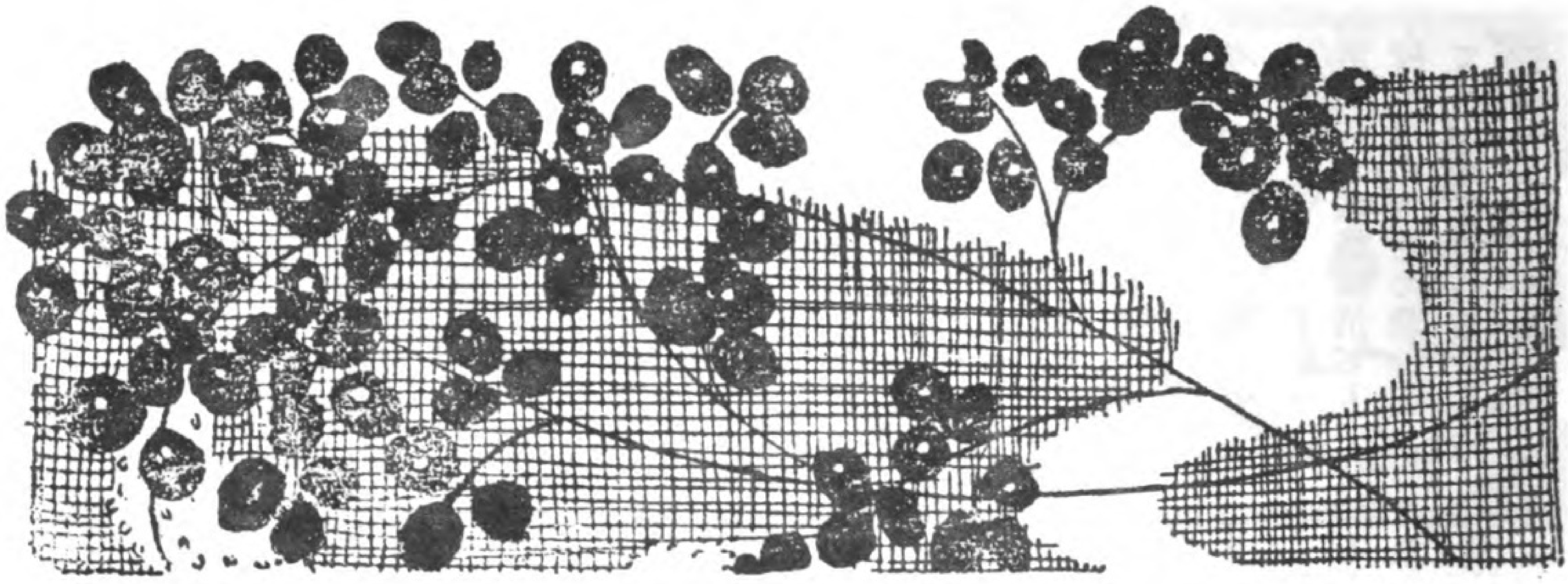
世の近代人よ、近代的女性よ、必ず愛讀してくれ、左傾派諸氏は無論のこと。

東京芝區新櫻田町十九
解放及解放群書發行所

解放社

振替東京三六九四四
電話銀座二〇七七番





巻頭雜記

學窓から社會へ！

高等女學校程度の學校を卒業する若い女の人たちの間では、就職を希望してゐるものが、百人中の八十六人の割合で有るさうである。（但、東京で）

四月、櫻の花がらんまんと咲き誇る頃は、若い女の人が新しい職業生活の首途に、顔を輝かしてゐる時である。

たとえ、人ごとでも、さういふ緊張した顔をした隣人をわが身邊にもつといふことは、氣持のよいものである。

□

職業に就かない人も、學生生活から家庭生活への推移は、かなり激しい變化だ。きつと、いろいろに考へさせられることであらう。

家庭生活でも、職業生活でも單純な學校生活から急に飛び込んで行つては、余程考へさせられることの多いものである。職業を通してみるこの社會、家庭を通して知るこの社會！

何とめまぐるしい社會生活の回轉であらう。

□

それにしても考へられることは、私たち女は、何と長い間、この社會をみずして、單に家庭に生き、職業に生きやうとして來たか、といふことだ。

一社會人として、今や私たちは、大急ぎで多くのことを知らなければならぬ。考へなければならぬ！　この目まぐるしく回轉してゐる社會生活のまつ只中で。

□

この「婦人運動」は、以上のやうな氣持の上で編輯し、人々に讀んでもらつてゐるものである。

現在澤山の婦人雜誌が發行されてゐる。百萬を突破してゐるかもしれぬであらう。而も、その九分九厘までが、莫大な利潤を積んでゆきつゝあるのである

□

利をつまうなどとは夢々も思つてゐないけれど、この雜誌を、一人でも多くの女の人によんでもらひたいものだと、いつも願つてゐる。

營利のために、俗流に媚びてゐる雜誌ばかりがあまり多くて、社會的に重大な今日、ほんたうに眞劍に社會問題としての婦人の問題にふれた雜誌を作る人が少くなすぎると思ふ。

この雜誌の基礎をかたくするために**誌代を前納して下さい。**明日といはず今すぐに未拂ひの分を送金して下さい。

あなたのお友達にも、本誌をすゝめて下さい。

一人が一人宛讀者を勸誘して下さるならば、基礎二倍の力にかたまります。

然し、理想をおうて雜誌を經營するといふ事は、實に困難なことだ。私達にとつて、全じ心持の友がだんだん殖えて來るといふことが、だゞ一つの力であり、喜びである。（おく

前納誌代送金法

▼誌代はすべて前納にして下さい

壹部　貳拾五錢（郵税五厘）
半年分　壹圓四拾錢
壹年分　貳圓八拾錢

誌代は必ず前金の事。
送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

大正十五年四月廿八日印刷納本
大正十五年五月一日發行

發行編輯兼印刷者　奥むめお
東京市外蒲田町女塚二四七番地

印刷所　單式印刷合資會社
東京市本郷元町二ノ四一番地
電話小石川二三九三番

發行所　職業婦人社
東京市外蒲田町女塚二四七番地
振替東京六四一〇六番



職業婦人運動の首途に

先きごろの「婦人及び幼年勞働者の夜業禁止」の請願運動に、女教員として、こんな政治的な仕事に加はることはいけない、と云つて記名調印するのを差とめた校長がありました。

この國際的に約束された婦人及び幼年勞働者の夜業禁止のための運動に、贊成者として名を書いて印を捺すだけのことが、どうして、女敎員として悪いのかしら。

×

大阪の職業婦人聯盟の生みの親ともいふべき井上さんは、上役の人から『團結の力』などいふ言葉を使ふ團体のために奔走をするのは怪しからぬと云ふので、首切られやうとしました。

×

東京にも、職業婦人の團体が生れやうとしてゐます。然し、うつかり名乘りをあげたらペシヤンコにつぶされてしまふから、御用心々々と大事をとつて、右見左見の態です。

然し、いつになつたら、もうよかろう、さあ名乘をあげませう、といふ時が來るのでせう。

×

職業婦人軍の出現は、ごく近年に突發した社會的事實です。從つて社會一般は、まだ殆んど職業婦人の問題に理解をもつてゐません流行だ、使つてやれ、流行だ、つき合つてみやう、萬事がかういつた風なのです。

その間に、職業婦人自身がどんな處におひこめられてゆくかは、云はずとも知れたことでせう。無理解なまはりの眼や口に遠慮をしてゐて。自滅をまつてそれでいゝでせうか。

時評

小倉ゆき

奧むめお

四月八日、殆んど一年振りで、私はまた九州ゆきの旅につきました。待たれてゐる先は小倉です。

『市の方で邪魔を入れるものですから、折角借りた公會堂まで取りあげられてしまつて、會場の場所が惡うて困りますが……』と、云はれて、去年主婦の友社の講演會のときと同じ女學校の講堂に私は立ちました。

東京でも大阪でも、その他の各都市でも婦人會の活動は、『市を愛する』心を出發點としてゐます。市もまた、その婦人會の活動を援けることに依つて、いろいろ市のために婦人の協力を得てゐるものであるのにこゝ小倉ばかりは、ことごとに、市側から妨害されてゐるのだとは、何と殘念なことであるでせう。それも、婦人會員諸氏の家庭の政黨關係から來てゐるらしい、といふのですから驚く外ありません。

在來の政爭を中心にした醜いいさこざに何の關りのない婦人たち同志の會合にまで、その良人や父親の政治的關係をひき出して來るなんて、小倉市の市政は余程どうかしてゐるにちがいありません。市町村の自治制に、婦人にも公民權を與へて參與せしめよ、といふのは一般婦人參政權論者の叫びですが、公民權を與へられもしない内から、婦人の仕事が政爭の渦に投じこまれて卷添を食ふやうでは婦人たるもの、余程しつかりしなくてはなりますまい。

國民生活の上から絶對的に必要とされるものも、正義も、輿論も、在來の政治圏内では、すべてが遺憾なくじうりんせられて、たゞ反對のために反對せられ、贊成するものも、何らか、我が黨のため利を約束するものでなければ贊成しない、といふ工合だつたのであります。が、今日以後、婦人の自覺した力は、政治を、さういふ政爭を中心にした駈引きから救ひあげて、あくまで社會的正義、國民の福祉の增進のために計るものにさせないではおきませぬ。

『市の方で、私たちの仕事にあゝして無茶苦茶に邪魔を入れる以上、私たちは退く事が出來ません。正しいと信ずることのために、ゆく處までやつてゆく決心でゐます』

かういふ意氣込みで小倉市の婦人

界のために起つた婦人が、すでに廿五人あるのです。變則な刺戟をうけて挑戰的態度に出なければならない事情にあるこの會は不幸だけれど、こんな關係がさう長く續く筈はないでせう。近い内に、市の方も、婦人會の力を借りないでは、やつてゆけないことを覺るにちがいありません。

娘のために

小倉婦人會の主唱者の一人橋本たか子氏のご良人は述懷して云はれました、『私は幸か不幸か、男の子は惠まれないで、女の兒ばかり四人もつてゐます。自分の子として、四人の女の子の將來を考へるとき、今日のまゝの社會で、この子たちが女として生きてゆかねばならないのだと思ふと、とても堪らない氣がします。實際、法律の上でも、政治上のでも、道徳でも、今の社會では女の立場は實にみぢめでありませんか。折角自分の娘たちを賢く育てあげたいものだとも思つてゐるけれど、又、自分たちで出來ることなら、どんな下積みにでもなつて、女の地位をよくしてゆくためにつくさねばならぬ、としみじみ考へさせられます』と。

今日のこの男性文明の花を開かせるまでには、長い間、實に長い間、女は下積の役に堪えて來ました。そして、この下積みの役割に甘んじて默々として働いて來た女えの報ひが今日のこの奴隷的地位なのではありませんか。

今日の女の要求は、男を下積みにして女性萬能の社會を招來しやうといふところにあるのでは決してありません。然し、もし、三人でも五人でもの男子が、娘をもつ父となり、愛妻を思ふ夫となり、妹の上を案ずる兄ともなつて、橋本氏のやうに遠い慮りを以て婦人のムーヴメントに好意ある力添を惜しまないのであつたら、私たち婦人の行く手が、どんなに安々と打開かれてゆくことでせう。

婦人參政權の實行

歸りに大阪へ下車して、その夜久し振りに石原良子氏を訪ねました。曾つて新婦人協會の關西支部長として、婦人の政治運動の第一人者格で活躍せられた人です。

『東京では、婦人參政權運動はその後如何です？』

『五十一議會のあの醜体はどうです。

『武藤さんも、惜しいおしいことですね、たとへ交渉團体になれないでも、純眞な一團が今の議會の内にあるといふだけで、いい刺戟でもあるし、有難い事だつたのに、人もあらうに本黨の床次さんなどと提携するなんて、いかに政治は力だとは云つ

てもねえ。

それに就いて、先日、朝日新聞が、ほんとに胸がすくやうな批評を書いて居ました。私はそれを半紙に張りつけて、外の事は何にも書かないで武藤さんに送つておきました……

いつ會つても、石原氏との話は、政治に初まつて、政治に盡きることを知らないまでにつゞくのです。

ところで今度は、非常に愉快なみやけ話を聞くことが出來ました。大阪では、長年の習慣で寒中でも、巡査の派出所のために、燃料炭の豫算がとつてなかつたのださうです。

『まあ、それでは火鉢なしでゐたのでせうか』

『そこがかうなのです。私がそのことに就いて府廳へ奔走に行つてゐたとき、各府會議員にも書留便で書いて送つておきましたが、

巡査『これこれ、お梅どん、炭もつて來てんか』

お梅、たすきがけですたすた走りながら振かへつて『わての家、炭やであらしまへんが』

かう云つて、お梅どんは走つて行つてしまつても、お梅どんは家へ歸つて主人にさう云ふでせう。そこで早速下男が主人の命をうけて炭を擔いで巡査の所へ屆けに來るのです。

萬事この調子で、今までずつと巡査の中の氣さくな人が、あちこち裕福な家から貰ひ集めた炭で暖まつてゐたのだといふのです。

大大阪府としてこんなことではならぬ、と思つて、去年の秋頃單獨で運動を初めて、毎日府廳へ、押かけたり、警察部長に面談したりして、いろいろ奔走をした結果、やつとのことで願ひがかなつて、毎月五俵の豫算をとつて貰ふやうになつたのです』

それからもう一つ。

『私の家へ來る途中に踏切りがありませう。この町では火事報知機が、あの踏切りの向ふ側にしかないのです。さあ、火事だ！、と云つたときに、ソレット駈けつけても、折惡しくパタリとあの踏切りで止められてしまつてはどうでせう。大事の場合には一分、半分をも爭ふのです。

私はとうとうこの願ひをも聞き入れて貰つたのです。見て下さい、ついこの間、あの横町に火事報知機が据えつけられたのです』

何しろ日參して、あれはどうなりました？と、煩く催促をするのですから、どうせ必要なことでもあり、いやでも私の願ひを聞き入れてくれるやうになるのでせう。參政權、々々、と云つたところで、かうして手近い處から一つ一つやつてゆく段

になればすぐにも實行出來ることがいくらもありますね、と、石原氏はいつものやうに顏を綻ばせて笑はれるのでした。

參政權運動と云へば、洋服を着て衆議（醜患）院へ日參でもしなければならぬやうにはき違へてゐる人も少くない婦人の中に、着々と、實地の婦人參政權を試みてゐる石原氏の活躍は、ほんとに痛快でありませんか。

全く、下水の中にも、水道の水にも、そこいらの小道にも、橋にも、又、米にも、味噌にも、菓子にも、反物にも、學校にも、病院にも、電車にも、どこにでも、今すぐに實行に移される私たちの政治問題がいくらでもあるのです。

まづ足もとから

大阪の職業婦人聯盟の人たちに二ケ月振りで會ひました。割合に落ついた氣持で、さきさきまでのことを考へながらコツコツやつてゆかうとしてゐられるのに何より安心しました。

誰でもさうですが、仕事を初めた當座は、何か忙しいことをしてゐないでは氣がすまないものです。新聞の材料になつたり、誰の目にも見えるやうな派手な仕事をしたりしてゐないと世間から忘れられてしまつたやうで不安になるものです。

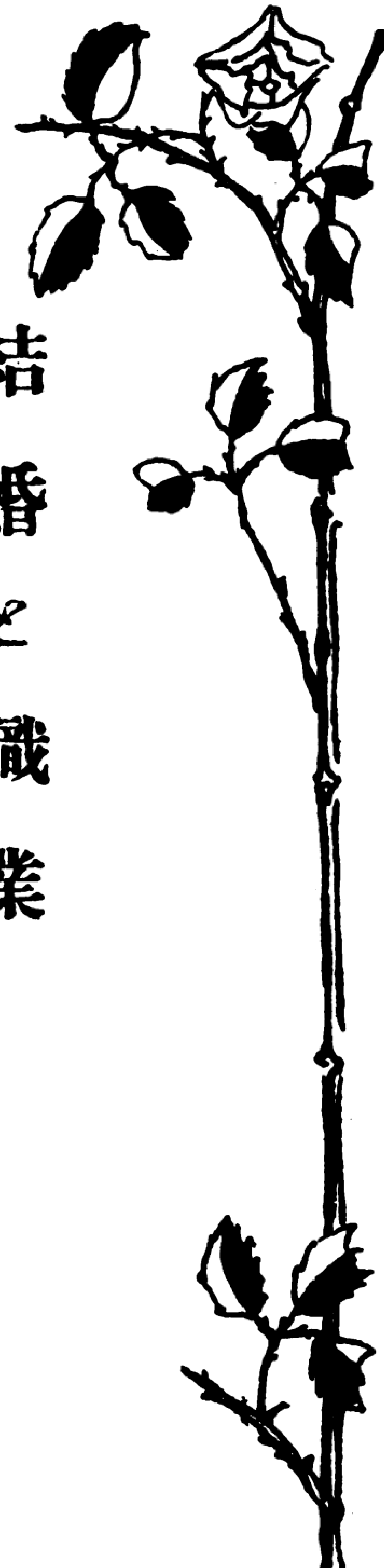
然し、八九年來、いろいろな婦人會が生れたり、つぶれたりして來たあとを振りかへつて、つねに私の思ふことは、誰でも身にすぎた事に手出しをしないことです。一時大きさうに、傳へられた會でも、次々にと新聞種になるやうな仕事をしてきりきり舞つてゐる內に、足もとからグラツイて倒れてしまつた例が決して珍しくありません。先づ足もとを固めよ、です。

ほんとうに生れ出づべくして生れ出でたやうな、意義ある仕事なら、默つて、コツコツとやつてゐる內にも自ら、その必然性は、ぐんぐん社會の上に伸びて行きます。

地ならしの出來てゐない仕事は、一旦社會がその仕事の存在を必要とするやうな重大な時が來た肝心のときにがらがらつと來て、潰れてしまふかもしれません。物見高な社會の好奇心の奴にならないやうに心掛けませう。

殊に、女が社會的に動き出してから未だ間のない現在では、女のする仕事はいつも、實力以上に誇大に書き立てられ、云ひ傳へられ勝ちなものです。職業婦人聯盟の成立當時にもこの感がなくはなかつたのです。

用心の上にも用心をして、物見高な社會にアヤツられて輕々しく動かないやうに、いつの場合にも心掛けたいものです。



結婚と職業

下田將美

最近、倫敦の教育界に於て最も八釜しい論議の中心となつて居るものは、結婚した婦人を學校の教師として採用することは良いか、惡いか、と云ふ問題であつた。ロンドン・カウンチー・カウンシルは、其教育部で、特別調査委員會を組織して其研究に熱中して居つた。此論議のよつて來つた原因は實は經濟問題であつて、既婚婦人が教師として就任して居つては、限りある教師の椅子は未だ結婚をしない、そして折角教育を受けた婦人の爲めに與へられる機會を尠うすると云ふ點にあるらしいのであるが、さて、既婚婦人は、新たに教師となることは出來ないと云ふことになると、そこに又別な問題が起つて、八釜しい論議を生むやうになつて來たわけである。

今日まで、委員會で色々に論ぜられて來た贊否兩論のあとを辿つて見ると、私達にとつては非常に興味深いも

のが多いのであるが、中で、代表的と思はれるやうな意見をあげると、次のやうになる。

サー・ヘンリー・ステツフエンは、どこまでも、既婚婦人も敎師として採用して差支へないと云ふ意見を持し、既婚婦人が、未婚婦人の就職に對して、一つの支障となるなどゝ云ふのは輕卒なる考へ方である。元來育英事業は、人生のあらゆる方面に理解と經驗とを持つものこそ望ましい、敎師を未婚の婦人だけに限ると云ふことは、敎育其ものゝ重大さを思はぬものであつて、廣い經驗と、理解ある既婚婦人こそ、敎師としては望ましいものであると。

スコツト・リゲツト博士もまた、違つた立場からこれに同じ、職業を、既婚と未婚とによつて差別をつけ、既婚者であるから就職することは出來ないなどゝ定めやうとするのは、明らかに、現代の勞動思想の傾向に反するものである。又、これを都市經濟の上から見ても、折角多くの費用をかけて養成した敎師資格者を、單に結婚したと云ふ事によつて一擲し去るのは、明らかに浪費である、不經濟なことでなくて何であらうと。

かうした意見に對して、反對を唱へるものはかう云ふ。即ちサージヨン・ギルバートは、元來、敎育事業は獻身的なものであつて、それに從事する者の個人的の事情と、分つことの出來ない性質を有するものである。にも拘らず、婦人が結婚して小供でも出來れば、到底、獻身的に敎育にのみ盡すといふことは出來なくなるのか當然である。こゝに、實に最大の缺點があると。これと同じ意見のものは仲々に多く、ウヰルトン・フヒツプス夫人などは、極力、結婚婦人は敎育界から退く可きであると主張し、結婚して學校を休み勝な婦人敎師に無駄な月給を拂ひ、更に、其、代位を勤める敎師に報酬を支拂ふのは、經費の負擔者である市民に、二重の冗費を負はせるものに他ならないと云つた。

バリー・ランバート博士も、若き結婚婦人の第一の主要な任務は、小供を生み、そして、これを良く敎育すると

云ふことになければならない。もしも、若くして結婚した婦人教師が、子供は生まぬ、種族は亡びても關はぬと云ふやうな意見を持つて居らぬ限りは、彼女の妻としての責任と教師としての責任とは、到底兩立すべきものではないと云つた。ビアトリス・ライアル女史も亦、若しも婦人が結婚して、家庭に於ての責任と任務とを完全に果さうとするならば、其他の仕事は、同時に完全になし得るものではない筈である。かういふ婦人を教師として雇入れやうとするのは決して正しいことだと云ふことは出來ない、と。大体から云つたやうな意見なのであつた。

私は今こゝで、教師として、結婚した婦人か果して適當か否かと云ふ批評を、各人の意見について述べて見やうとするのではない。もつと廣い一般的な問題として、結婚と職業とが、果してどんな關係をもつであらうかを愼重に考へたいと思ふのである。

結婚は當然產兒を意味し、從つて育兒の負擔を意味し、同時に、家庭の主婦としての婦人の任務を度外するわけにはゆかない。それ故結婚と云ふこと自身が大きな負擔である。結婚した婦人の、職業につくことが良いか惡いかなどゝ云ふのは末であつて、これは良い惡いの問題ではない、もつと本質的な男性と女性との性の相違から生れて來る、不得止に自然の負擔の差異の問題である。事實上、結婚した婦人は、職業界から退くのが多い。

英國の婦人勞働者が、歐洲大戰中あれ程偉大な進歩を遂げ、あれ程廣い勞働の分野を開拓したにも拘らず、戰爭後は、全く振はなくなつたのは何によつて來るか、と云へば、男性勞働者の壓迫も、その重大な原因ではあるけれども、更にもつと重大なものは、結婚して勞働社會から退いてしまつたことである。英國の勞働組合が婦人に對して平等の門戸を開いたにも拘らず、婦人勞働者の團結が、遙かに男性のそれよりも下位にあるのは何によつて來るか。これは、婦人の勞働か永續性を缺いてゐる爲めである。一時的に結婚するまで勞働し、結婚すれば止めてしまふからいつまでも未熟練工ばかりで、男性の

やうな熟練工が出來ないからである。未熟練工ばかりで力强い勞働團結の出來る筈がないのは、これ亦誰にでもわかる所であらう。資本家に對して眞に力ある戰鬪力を持つものは、たゞ何ものにも代へ難き熟練工の團結ばかりである。婦人勞働者の最大の弱點は、實にこゝにあると云つてよい。

そこで問題は、既婚婦人の職業がよいか、惡いか、適か不適かと云ふのではなくて、婦人の勞働の自覺が、どこまで徹底するかどうか、と云ふ事になる。六つかしい問題である。

日本に於ても、職業婦人増加の大勢は、各方面に職業婦人團体の成立を促しつゝあると云ふ。かうした團体の成立を見るにつけても、私の思ふことは、果して職業婦人に永續性ありや否や、言葉を換へていふならば、强い團結の基礎ありや否や、と云ふことである。

結婚と職業。母としての負擔を負はされてゐる婦人にとつては、これが最も重大な鬪爭事とならう。問題は簡單に片づけらる可きものではないだけに、こゝに私は、職業婦人の一當大きな惱みを認めざるを得ない。

どうして豚が猪になつたか？

……橋爪　健……

虎が猫に化り、狼が犬になり、猪が豚になつたといふなら自然である。それが若しその反對になつたとしたら面白いではないか。いや、面白いなどと云つてはゐられない。進化論が逆行するのだ。そこには何かしら不自然な怖ろしい祕ましい事情が暗示される。

今までの女子と云ふものは、わけてわが國にあつては殆ど家畜のやうなものだつたではないか。暗いところに入れられ充分に肥らされて、やがて屠殺される無口の豚……遺産（プラスとマイナス）の相續と血統の保存のために嫡出子を生ませることゝ女中代り女郎代りにコキ使ふことゝ、たゞそれだけのために結婚に相應ふやうにしか彼女たちは育てられなかつたのだ。

こゝに選ばれた『彼女たち』は不幸である。豚であることよりも賃金も地位も惠まれてゐない無産者の娘であるといふ點に於て更に不幸である。彼女たちは『豚』でさへ居られなかつたのだ。豚小屋から飛出した彼女たちは果して幸福であつたか。

一口に職業婦人といつても、種々雜多

（二十三頁へ續く）

諸氏の回答

大阪に出來た職業婦人聯盟を初めとして東京にも、神戸にも、各地に同じやうな團体が成立されやうとしてゐます。

一、職業婦人運動は、これからさきどういふ風に進んでゆくべきでありませうか。

二、職業婦人聯盟の會員に對する希望は？

布施辰治

職業婦人の運動には、内外二つの方針があるやうに思はれます。即ち對內方針としては、一般の勞働組合運動と同樣、現に職業を持つてゐるものゝ組織統制の確實を期さなければならないと思ひます。更に對外方針としては、現在婦人に閉鎖されてゐる職業を解放せしめるにありと考へます。尚一言附け加へて置きます

が、現在の婦人を虐げて居る因襲傳統の内で一番ひどいのは、法制上の壓迫です。經濟上に於ける婦人の無力と云ふ事も、又現在の法制が、婦人の職業を壓迫してゐる結果のやうに思はれます。故に、職業婦人運動の戰術は先づ、政治運動に其の戰端を張つてはどうか？と思ひます。

土田杏村

一、どの事業でもよろしい。永續的にやり通ほす根氣を持つて下さい。少し運動を起してはつぶれる遣り方がいけない。其れに何でもよいから最も出來やすい仕事からはじめて下さい。

一、職業婦人を腰かけだけのことゝ考へないで、下さい。永久的に、確實に職業婦人問題を解決する熱意を持つて下さい。

下中彌三郎

一、經濟的利益の一致によつてまづ團結すべきでせう

が、しかし、そこにのみ止つてゐてはいけますまい。女性の眞實の解放を明かに見つめての實際運動である事を常に念頭からはなさぬやうにあるべきだ。

山崎今朝彌

素人の腰だめといふ事がありますが、職業婦人運動は、婦人解放運動も、勞働組合運動だと心得て進んで行くべきではないでせうか。

從つて職業婦人聯盟會員に希望する事も、其心掛で進んで貰いたいといふ事ですが大概の婦人聯盟は、ヨイ加減の名で立消になるので。

下田將美

一、小さくとも良いから固い團体を作つて、漸次に合同するなり、範圍を廣くするなりした進み方がいゝと思ひます。最初から名ばかり美くしくて實のない團体が出來るのは將來の支障にこそなれ、悦ぶ可きことではありません。

二、團結を固くすること。これ以外に希望はありません。主張も運動も、固い團結力があつての後のことです。

梅山一郎

今日まで職業婦人團体が誕生した動機を見ると(一)失職の苦い經驗から團結の必要を感じて(二)法令や税金問題で同一の利害を感ずる同職業の發達保護の爲めに(三)職業婦人としては技術を磨き人間の修養を目的として(四)或る人が職業婦人の團結を作らしめてそれによつて名譽と生活の餌を得る爲に……(五)職業學校の宣傳の爲めに等が主なるものゝやうであつた。而して何れも(一)財政が續かぬから(二)內輪揉めから(三)資本家の壓迫にまけて(四)同志職業婦人の冷淡さに根まけして……等で盛衰常なく一つも滿足に育ち上らぬやうであつた。今となつては皆がこの事實をよく知りぬいてゐる。誰がこの難關を突破しやうとするか、私は思ふ、結婚前の職

業獨立出來ぬ補助收入の職業、男の補助程度の仕事をやる職業……に携はる婦人が何處から見ても職業的に强味のある可き筈がない、この職業婦人が團結して世の中に力を示し正義をふりかざして一步の幸福でも得やうとするのであるからそこには以上の惡い條件をつぐなつて餘ある多勢の人と人とをつなぐ力がなければならぬ。熱が起らねばならぬ、その力となり熱となる者は即ち指導者の人格と信念である。私は今日の日本の職業婦人團体のよい發達は人格と熱とを持つた指導者に比例すると言ひ度い

方法は現實の調査研究を人格と熱ある人の前に運べば自ら發見することだと思ふ。我等は良き指導者の一人でも多いことを望む。而して現實の正確なる調査研究を一つでも多く彼の女等に與へ度い。

堺 利彦

一、先づ直接の雇主に對する反抗運動。次に、家庭、社會、及び國家に於ける男性支配に對する反抗運動。同時に、一般無産者運動の一部として、ブルジョア階級、及びブルジョア政府に對する、政治經濟的反抗運動。

一、兎にかく先づ結束を堅くする事。それには、勞働運動および農民運動の實際について、その經驗に學ぶ事。

山川菊枝

(一)今日までの所、職業婦人の團体は大部分社交機關の性質を帶び、資本家と戰ふところまでは勿論のこと、極く初步の敎育的な仕事すら企てずに終つたやうです。といふのが、外部からの壓迫を俟つまでもなく組織者自身の間に運動の性質に關するハッキリした意識がなく、「お互に團結しませう」といふ程の、極く漠然とした、捉まへどころのない氣分で集まつてゐるので、內部的にその團結を固める基礎がないからだと思はれま

す。今後此種の運動に關與する人は、もう少し勞働運動に關する智識を持ち、その仕事の目標をハツキリ意識してゐたいものです。

今日の所、職業婦人の團体は、たとへ出來ても、直ちに勞働組合の性質をもち、其活動を始める事は困難でせう。結局職業婦人に對する極く初歩の教育機關として最も有用な働らきをするのではないかと思はれます。

此教育といふ意味は、職業婦人に賃銀勞働者としての自覺を與へることゝ、團體的行動の訓練を與へることゝ、二つを指してゐるのです。職業婦人團体がそれ自身として直ちに勞働運動の第一線に立つことは不可能でありませうが、茲に云ふ教育的な毒事を根氣よく續けて行つたなら、それだけでも十分存在の價値はあると思ひます。

(二)(一)の答に含まれて居りますから別段申上げる必要はありますまい。

千葉龜雄

一、各職業婦人が、その職業に、從斷した、それ自身の組合をつくり、更に委員制度なり何なりで、大横貫した總同盟となり、それによつて職業婦人全体の利益を計るのですがそれにはまづ縱斷した組合を作るのが必要で、そのために、その成員なり、世話役なりになる人々の、自成と自覺を望みます。

二、かうしたものは、國境によつて分立すべき性質のものではありませんから、結局は大合同するでせう。其過度期として、先覺の土地に先づ別々に起つて行きます。

淺利順四郎

二つの課題を與へられて、意見を求められたが、正直な所、私には職業婦人の問題の根本がよくわかりません。

職業婦人の給金や勞働時

間や、就職口の問題は、社會及家庭の構成に關する根本論から考へてかゝらねば適當に解決し得ないと思ふのです。

然し差當つて婦人智識勞働者が團結の力によつてその地位の向上を計るといふ事は、適當且必要だと思ひます。

所で、男子の場合に於て結合の最も困難とせらるゝ智識勞働者の團体が、女子の場合に於て、第一の着手として、能く成功するに適するかどうか、これも大きな疑問です。

山名義鶴

一、職業婦人運動はまだ勞働運動なとと、同一には計畫され得ないと思ひます。會員を増加さすことばかりに關心しては、會の存在をボヤケタものにしてしまつて、万一何かの變動に遭つて會がつぶれた時には何も殘らぬことになると思ひます。（失禮な申分ですが何時潰れるか解らぬと云ふ事を、まだ覺悟してかゝらねばならぬと考へます。）だから當分は會員は少數でも精鋭主義で、會の存在の基礎を固める爲めに、會の主能性質を明確にする方針で進むべきだと思ひます。

二、雜誌の中で拜見した文句ですが『心の中で敵を誇大視する』弱氣を一掃して縱橫の活動する事を希望します。　以上

藤井悌

旅行してゐましたので職業婦人聯盟に關するお葉書只今拜見。貴誌四月號に間に合ふやうお返事することが出來ませんでした。たゞ折角のお尋ねですから突差の思ひつきだけ申上げます。職業婦人聯盟會員に對して差當り特に希望したい事は左の諸點です。一、感情的の內輪喧嘩を特に止む事。二、眼前の具体的利益がないからとて飽きてしまはない事。團結其物を價値と見てねばり强く兎に角持ち續ける事。三、會合に缺席し

ないやうに努める事。

一、無産階級運動の一分派として進むべきものと思ひます。

二、(イ)共同目的の意識に即さる團結力の増進。

(ロ)全無産階級運動の意義及びその現勢に對する理解の増進。

大山郁夫

江口渙

御返事遲れて失禮しました。職業婦人運動は、單なる政治運動、参政運動であつてはならない。明かな無産階級的意識を、力強い階級的團結の上に立つたものでなければならないのは勿論のふまでもありません。一種の職業組合、謂はゞサラリメンス・ユニオンのやうなものを随所に造り、その内部的結束と團体的連結を極力、堅めて行く事に依つて、經濟的な闘爭機關としなければならないと思ひます。經濟的な爭闘機關として十分な威力を備へる事に依つてのみ、始めて他のあらゆる闘爭に役立ち得るものですから先づ經濟的に團結し、その團結力によつて他の方に當らなければ決して十分な力強いものとなる事は出來ません。

四月號休刊のお詫び

印刷所の都合で、四月號の刷り上りがだんだんおくれて行つた。その内に、私の九州ゆきになり、關西ゆきになつて、結局五月號として早く出すより外なくなつてしまつた。この五月號、そのために時期おくれの原稿もあつて心苦しいけれども、六月號より必ず前月末にはお手もとに屆ける事を誓ふことに依つて、今度のところは許していたゞき度い

若き女性に寄せる

新居格

わたしは万事を大目に見たい。寛大でありたい。干渉なんか極端にきらいだ。干渉されることも干渉することも。でも、あんまりあぶなつかしく、そして少しの注意さへすれば運命を狂はせずに済むのではないかと思はれることとで、誤り、うつかりしてゐて、そのためについ躓きはせぬかと思ふやうなものがあつたとすれば、私はたゞ、好意ある目くばせ位はするであらうそれで氣づいてくれれば幸、それ位の程度では氣づいてくれないやうなら、仕方がないと諦める。私は思ふ好意ある目くばせ位は斷じて干渉ではないと。

私は、指導してやると云つたやうな昂ぶれる氣持の何人にも賛成が出來ない。實際若かい時代の若かい女性を、年とつた先輩とかがどれ丈分かるものか。十分理解してゐると思ふことが、どれ丈ほんとうの理解であるか、私には分からないやうな氣がする。だから、私は私が必ずしも若かい女性達の心理を理解した上にこうした事を言つてゐると云ふ課ではない。私は私として思つたことの二三を告げるだけである。そのうちに何かゞあれば、その部分丈取つてくれればいゝと云ふに止まる。

先達ても「婦人の國」の合評會があつて、招かれて行つた。課題はモダン・ガール、そしていろいろの人

達がいろいろに說をなし、その見解を披瀝した。
それとは別に私は云ふ。私はモダン・ガールと云ふ言葉が濫用されてやせんかと。洋裝さへして、氣取つて、洒落れて、散步路の舖石道でも步るいてゐると、「君やつはモダン・ガールだね」なぞと囁く人があるやうだ。でも、そんな事がモダン・ガールなら譯はない。金さへあれば一日でなれる。羊屋あたりで洋服を拵へてもらつて、銀座の何とか云つた婦人帽專門の店へ這入つて、神田小川町のこれも名前を忘れたが山田耕作君の話では中々洒落れた靴をつくると云つた靴店なり、竹友藻風君の話ではカフエー・ライオンから同じ並びで西へ數軒目の「二葉」とか云つたつけ、すべて外國直輸入の雜貨だけを賣つてゐるとかだが、そんな店へでも行つて、持物なり裝身具なりを購ひ、その上美容院にでも這入つて來ると、直ちに一個の所謂モダン・ガールが製造される譯だが、私にしてみれば、そんな格好が問題ではないのである。心の上の問題だと思ふ。新しい時代の時代感を含んだ觸感の新しい、機智と聰明とを行動に熔かし込んでゐるやうな人のことでありたいのだ。それは何も形の上の問題ではない
私はある劇場の廊下で或夜白ろいカラーをして襟飾を締め、脊廣、半ズボンの男裝、云はゞ、女が馬にでも乘るか、銃獵にでも行くか、スキーでもするかと云つた風の格好をした若かい女性をみた。シネマの女優のやうでもあつた。鳥渡格好はよく、實際よく似合つてゐて見た目の感じはよかつたが、それはモダン・ガールなんであらうか。いやいや、その女の話の平凡で常識的で、むしろ愚劣で、低卑で、閃めきがなくて、機智が零で……と云つたやうな感じをうけた。明快に私は宣言する、そんなものがモダン・ガールであつて堪るかと。
世間はモダン・ガールを形の上だけでみて、侮蔑したがる。惡るい方面だけを見て惡るく考へたがる。人間にある惜新性の說明は米田博士に讓るが、僕は僕自

身の考方からこう云ふであらう。保守思想のきらひな私は保守感情をもきらふ。保守感情をきらふだけでなく、保守的本能をもきらふものである。保守思想をきらふ人は多い。理想は概念的なものだから何とでも云へるからである。感情になると、更に本能になると、（思想の上では保守思想がきらひな人であつても）自づと保守的で惜新性の傾向をもつものが少くない。親と子との感情、舊るき時代感と新しい時代感とが、理窟は同じ場合でも、感情の上にしつくりしない所のあるのは大方そこの點ではないか知ら。

盲目的であらうと、なからうと、氣障さ加減と、鼻もちにならぬ要素とがあつても、僕は、そうした缺點を大目にみて、前へ前へと眞一直線に驅けつけて行く新時代のドン・キホーテを愉快に見る

・モダン・ガールが形の上の問題でないとすれば、モダン・ガールはブルジョア的であるにかぎらない。私はプロレタリアン・モダン・ガールのあるべきを考へる。モダン・ガールがダンス、音樂、贅澤、氣持のいゝ晩餐、快適な享樂、そんなものの屬性がなければありえないとするやうな押しなべての世間的解釋に反對である。貧しさを輕蔑したり、貧しさが分からないモダン・ガールなんて本物ではない。贅澤は好きでも、貧しさが分かり、いや、社會的存在としての貧しさが分かつて居ればこそ、ブルジョア的贅澤を、高價な貴金屬でもそんなものが何だと計り輕くあしらつてのけ無駄にしてもいゝ位の考であつていゝのだ。贅澤への拜跪ではない。贅澤やブルジョア趣味を粗末にしてやるのだ。尊敬ではない輕蔑だ。だから、モダン・ガールが資本主義的崩壞現象にあらわれをとつても、（今の過渡期にはこのあらわれを取つてゐるが）ブルジョア的のものに夢中になつて惑溺するのではなくて、ブルジョアの價値とする所を無價値、無意味に蹴飛ばすやうな囚はれのない、自由で、不羈な心情がモダン・ガールにあつていゝのだし、又なくつちやならないのだ

私はモダン・ガールをブルジョア的のあらわれをとる場合が今の場合多いからと云つて、ブルジョア的としてそれを指彈する理由を解する事が出來ぬ。それは形の上の問題ではないのだから、社會主義國にはブルジョア國よりも更にモダン・ガールが適應する。ウイリアム・モオリスの理想鄕の中に出て來る女なんかはほんとうのモダン・ガールなんぢやないか。

大体世間なんて實にいゝ加減の事を出鱈目に云つてゐる場合が常だ。社會見解の結論だとか、今の新聞程度の考方なんてあまりに莫迦莫迦し過ぎる。

飛躍して結論に急ぐが、僕の思惟するモダン・ガールを究竟にもつて行くと、それは無政府主義の社會にあるべき氣持のいゝ女性になるのだ。自動、自發、自律的なものに。であるから僕はモダン　ガールを徒に輕蔑せんとする俗論には敢然として對抗することを辭しないのである。

（十三頁より續く）

な階級のあることは勿論だ。が近代の職業婦人は大體家庭内から家庭外へ働きに出るといふ點で一致してゐる。これまで家庭内でしてゐた消費的乃至生產的勞働から、所謂社會的經濟組織の中に吸ひこまれた點において一致してゐる。

とにかく彼女たちは外に出て働かねばならなくなつたのだ。家庭内の自給自足的生活が『機械』と『貨幣』とのために全く崩壞してしまつた今日、その子女が家庭の生計を助けるためには、どうしても家庭内にとゞまることを許されなかつたのだ。

かくして家庭を逐はれた彼女たちは、半ばは家庭の生計を助け、半ばは自らの經濟的獨立をかちえつゝ、資本主義的經濟組織に捲きこまれてきた。そこで彼女たちは果して何者にぶつかつたか。曰く、男子横暴。曰く、資金萬能。曰く、雇傭者專政。曰く、ブルジョア婦人の『新時代』等々。こゝにおいて、かつては小豚のやうにつゝましかつた彼女たちは、自衞的必要と自己擴大の本能とによつて次第に猛となつてきた。いやならないではゐられなかつたのだ。

彼女たちが新たにかちえた境遇と、新しく當面した刺戟とは、良い意味でも惡い意味でも彼女たちを猛化してしまつた。彼女たちは資金に對して、雇傭主に對して、男子に對して、ブルジョア婦人に對して、一種の反抗的な絶望的な氣持ちを抱いくとともに、それらに對して不可抗的屈服を、虚無的逃避を選ばされてしまつた。かくして彼女たちの人生觀も生活態度も全く一變してきたのである。

こゝに第二の意味での『新時代の女』が出現した。しかも、これこそ眞の意味での新時代女性の素質をもつのである。



さき頃日本に來たお金持の觀光團がその最初の印象を次のやうに話してゐたさうである。
『よれよれになつた木綿の靴下に、す法のあはぬ喪服のやうなものを着た女車掌！　東京驛の前でこの異樣な娘の姿をみて、日本に對するわれわれの憬れの夢は破られてしまつた。………
　富士山と櫻の花をもつ日本の娘は、なぜ、あの美しい振袖で琴を彈くかはりに

彼岸近く（身邊雜記のうち）

金子しげり

飽く迄晴れぬいてゐて、それで何處となくぼつと霞んでゐるやうな空が、お彼岸近くになると多い。

これもさうした朝の出來事、私は横濱の某警察署からの呼出狀を受取つた『到頭……』といふ心持だつた。默つて私は陽の下をまつすぐに横濱に出かけて行つた。

省線の窓硝子にも川崎電氣の工場の屋根にも、そして横濱のバラツク街の上にも、金粉をふつかけるやうな春光は輝いてゐた。

假橋をいくつも渡つてゆくやうな方角にあるその警察への道、泥で半分埋つた堀割だの、河岸ふちの小學校の白つぼけた運動場だのにも、明るい陽ざしは有り余るやうにさしてゐた。

バラツクの警察に、これは又思ひ掛けぬ海老茶袴をはいた十二三の女給仕に案内されて私が最初に入つたのは、刑事室だつた。

六疊ほどの疊敷の部屋に、机代りの食卓を圍んだ十人余りの刑事がもうもうとした煙草の煙の中から一齊に此方を振返つた。その部屋も日當りのよい素的に明るい部屋だつた。

こんなに醜い袋を着、男のやうに働くことにしたのか？』と。

×

これについて山川菊榮氏は、氏一流のあのメスのやうな筆を以て云つてゐられる。『復興の東京の到るところにみられる土工の仕事に、振袖ならぬ繼ぎはぎの布子を着、赤子を脊中にしばりつけた「猿猴」の女たちが、琴の代りに、ヨイトマケを叫ぶ姿をこの觀光團は見落したらしい………』

×

更に又、耳もつんぼになるやうな機械の騒音と息もつまるやうな綿ほこりの中に、十才を出たばかりの女の子が、終夜一睡もせずに糸をつないでゐる光景、簡袖姿に、落ちさうな腹を抱へて、吹きざらしの校庭に掛聲勇ましく体操を敎へてゐる女の先生、これらの姿を觀光團が見おとしたのは殘念なことであつた。

×

日本の女が、富士山や櫻の花と並び稱されるのは光榮至極だけれど、序でに、

『何うぞ此方へ』一人が火鉢の傍を明けてくれた。

『あなたとYとどういふ御關係ですか』係らしい一人が正面に座つて口を切つた。

『Yは私の從兄です』私は火鉢の傍ににぢりよつた。

□

暮に私は盜難にあつた。それもたつた二日、病後初めての講演で湯河原まで行つた留守の間に、有金全部といつてもいゝ、私が前の勤め先を退く時に受取つたいはゞ身代金をその儘預けておいた預金張と印とを持出されて了つたので、犯人はそのYなのであつた。

Yの父は私の母の兄で、支那浪人としては孫文の懷刀みたいな事もしてゐて、相當巾のきく方だつたが十五年程前に酒のため腦溢血で旅先で死んでゐた。Yは長男だつたが、Yの母親は彼を生んで間もなくY家を去つたので、彼は父の留守勝な家に、繼母と異母弟の間に暮さねばならなかつたし、或る時などは、父親の考へで、鎌倉の某寺に小僧にやられてもゐた。そして悧發で知られてゐた彼は、父の死ぬ頃には一ぱし不良少年になつてゐて、適齢になつた頃、兵隊にゆく代りにたうたう巣鴨に送られる事になつた。

その時は高輪警察からだつたが、差紙が來て私の母が出向いて行つたのをまだ女學生だつた私は覺えてゐる。

我が若き從兄はかなし弟と母をのこしてひとやにゆきぬ
さかゝりし故にその身をそこなへる若きいとこは悲しかりける
二十一從兄はかなし徵兵にとられずくらきひとやにゆきぬ

こんな歌がその頃の日記に殘つてゐる。

富士山や櫻の花と同じやうに、女も食はずに生きてゐられたらなほ結構であらうに」と。

×

今度東京に、派出婦聯合組合が公認せられた。大和俊子さんが初めて派出婦會を拵へてから十年目である。東京だけにも、派出婦會は六十幾つあるが、組合へ加盟を許されたのは僅かに十にすぎぬと。

この組合では、派出婦に對して變な誘惑をしたり、料金を不拂にしたりする常習者の名簿を作つて、今後の申込みに應じないやうにしてゐるが、登錄された常習者といふ中には、代議士、實業家、文士、畫家、商人、官公吏など五十幾人ある。

×

春着一とそろへに　一萬八千九百四の繭が要る。

東京蠶糸學校長本多博士の調査に依ると、春着一とそろへ、　綿入二枚重ね、長襦袢、半襟、帶、帶揚、帶留、腰帶の七點に要する生糸の量が一貫六十九匁。

その後、いつでも心から消えた事はなかつたが、逢ふ日はなかつた。洋食屋をやつたり、女髪結と結婚した事など、私の母への住所なしの便でわつかに聞き知つた。

そのYが、一昨年の夏、いきなりK新聞の窓口に來て面會を求めた時、私は名刺だけでは見當もつかなかつた。彼は若くて死んだ私の兄にひどく似て、がつしりと逞しく立派な青年になつてゐた。そして、以來私と彼との間に交際が初まつた。いい妻君を持つて正業についてゐる彼を、肉親の少い私は大切に扱つた。金の無心にも、心で熨斗をつけて出した。打絶えてゐた間の事は何にも聞かなかつた。ところがその交際も、半年續かずに早々彼が姿をかくす時が來た。それは悲しい事件であつた。

彼はその後、私の母の仲介で、別れて廿八年目で實母と名乘りあつた。しかも三十年近くを獨身で教員生活をつゞけて來た實母と、旦暮母親にあこがれつゝけてゐた彼との會見は、彼が思つてゐた樣なものではなかつた。彼にいはせれば母の心は冷たかつた。彼はみたされなかつたのだ。彼のイリウジヨンの破れ易い事は、私にも彼の妻にも知り切つてゐた事だつたが、事實はどうにもしやうがなかつた。そして彼等の間は、僅か一ケ月たゝぬ内に決裂した。原因は、彼が事業上の金策を母に賴んだのを、彼に信用を置かなかつた彼女が、私の母に『それ見ろ』とばかり抗議狀を送りつけて絕つて了つたからである。お人よしの私の母から、更に絕縁狀を送られた彼は『皆のものを見返す事の出來るまでは』といつて身をかくして了つた。

それが又昨秋から、私とだけは交通が初まつてゐたのだつた。相不變焦つてゐる彼であつた。母を呪つてゐる彼であつた。私は浪々の身の閑な時間を

繭の數が一万八千九百四、この繭を作るまでに必要な桑の葉は、三百十八坪の畑がなくては出來ないのださうな。

これに、桑を作る骨折や、養蠶當時の苦勞や、糸を採り、機を織る女工の苦役などを加算したら、實に、大變なものになる。

×

巧妙な機械が發明されて、人間の手や足はだんだんおひのけられてゆく。

自動接續器が、電に機に据つけられるやうになつてから何千人の交換手が不用になつたといふ際でその職を失ふことになつた。

今又鐵道省で、鑿孔機、仕譯機、統計機が据へつけられて千五百人の女事務員が無用になるといふのである。

嘗つて男ばかりに限られてゐた勞働分野に、女子供が精巧な機械と共に移入されて男をおひ出した。やがて、女子供もおひ出す機械が續々と出てくるであらう

×

近頃婦人勞働に關係の深い仕事に手を

この寂しく悲しい從兄と、よく對座して暮した。

物質に惠まれぬ事は、いつか彼の最後の頼り場であつた愛妻との別離ともなつた。そして押しつまつて私の金を持ち出した儘、再び行方は知れなかつた。

私も知らうともしなかつた。私は彼の運命を祈る他はなかつたのだ。

所が、二月の末のこれもよく晴れた朝、私は彼からの手紙を手にした。死んで詫びるといふ長文の伊豆の海岸から出した手紙であつた。私は取るものも取敢ず急行した。そして無事な（勿論いきてゐると思つてたから出かけたのだが）面を見て、默つて、問題には一言もふれずに一夜を泊つて歸つて來た。

『あんまり年よりを心配させるものではなくてよ。母さんも大變弱りましたからね』

別れる時、驛でこれ丈いつた。その時宿の庭からわざわざ切つて持ち歸つた緋桃は私の二階の室に枝の先の先まで花を開いた。それを見る度に私は彼を祈つた。何にもなくてくれと。

□

『あなたは御存じはないでせうがYは前科四犯ですよ』聽取書を作る爲に引出された警官の前でかう聞かされたが、別に意外でもなかつた。

『あなた、あの宿の拂をしてやると約束されたですか』

『いゝえ。何にも』

私は、何度も僞られた過去の小さい經驗をふと回想した。要するに弱い。弱さが人間の罪を生む。私はしつかに彼に面會を求めた。

つけやうとする婦人が多くなつた。
然し、何れも智識階級の婦人の興味から割出されたものばかりで、直接に勞働してゐる女たちは、相かはらず牛馬のやうにこき使はれてゐるだけである。

×

然し、最近、婦人勞働者で組合に加入して來るものがだんだん多くなる傾向があつて、組合としても、それぞれ必要に應じた教育運動に熱心になりだしたといふこと。
勞働總同盟の婦人部では、この議會に婦人及び少年勞働者の夜業禁止の請願運動を行つてゐるが、外に、研究會、あみもの講習、衞生講話などつぎつぎに行つてゐる。

×

勞働組合評議會婦人部でも、月に一回婦人版を發行する外に、毎月二回以上組合員の茶話會、研究會をつゞけてゐる。
市電氣局自治會でも、最近婦人部の基礎がかたくなつて、いろいろ計畫中である。

ガチヤリ、留置場の扉があくと、この前あつた時のまゝの姿で、顏だけはすつかりやつれて、無氣味に青白い彼が出て來た。どういふ譯だか、金紗の兵兒帶の代りに繃帶の耳みたいな布のよつたのをしめてゐるのが目だつた。
十分後私はまた麗かな春光の中を歩いてゐた。
住込窃盜を働いた彼は前回の出獄後五ケ年を經過してゐないために、恐らくは二年以上の刑に處せられやうと刑事は話してくれた。
『あなたがどんな偉い人にならうと、又どんな惡事を働かうと、私の從兄といふに何の異りもない、待つてゐるからしつかり勤めてゐらつしやい』
私はこんな言をいつたやうだつたが、それは實想からは何といふまだるつこいものだらう。彼が最後の犯行を企てた動機は、彼の妻と緣の全く切れた事だつた。銀座に名高いカフェーの女給になつた彼女に新しい愛人の出來た事が、彼の心を破つたのであつた。
橋の袂で、私は同じ呼出しを受けて馳けつけた彼女と出あつた。彼女は、彼が私の金を持ち出して彼女の質に入れてあつた衣類を出して貰つた事を知つた時、彼に自首を進めた女であつた。そして彼にその强さがないのを知つた時、彼と共に死を決心して、自ら首をくくらうとさへしたのだつた。彼女はいつた。
『あの人はかくまつてくれと申しました。本當に私にその力さへあつたならば……それは私一人は働いてさへ居れば獨立してゆけます。でも二人を支える力はありません』
私自身彼に唇を開きえなかつた事は『死んではいけない』といふ事だつた。死んではいけない——私の心は叫ぶ。しかし『それなら働くに職も無い自分

青谷の岡

▲

櫻咲く青谷の岡に同志等と
革命歌うたふ
春ののどけさ

▲

櫻花散る如く社會の變ると
いふ友あり
俺は論駁をなす

▲

酒を飲む奴等をみんな
聡衆として
花見つゝ演說をなす

▲

『失業者救濟運動』
とふざけつゝ
コートの中に石を投げたり

―カズヨシ―

がどうして生きてゆけやう』といはれた時、私に何の答の持合せがあらう。暮に就職口を頼まれて返事のしやうがなくて、返事を聞きに來るのを逃げるやうに、その湯河原に出かけた私だつたもの、生存の保證を誓へない限り、祈り以外に何があらう。

『二年でも、とにかく食べさせて貰へるのは有がたい事なのかも知れない』恐しくすみ切つた頭の中で、私はかう肯いてさへゐた。

勿論私の被害は親族ではあり、私に告訴の意志のない以上問題にならず、他の金錢關係も、賠償すれば刑期がまづ半減するといふ事を聞いた時、實母だけが、その義務と、能力を有つてゐると思つた。行つて話さうかとも思つた。東京でも金持の子女のゆくので有名な某女學校の學監として、時めく彼女の前で私は彼の話を事實通りに話す事を想像して聊か痛快味をさへ感じた。然しそれが彼に何であるだらう。

『一人の人間を捨てないといふ事、たゞまあそれだけだつた。自分にしてみても彼に行つて來た事は、私はそれが一人の人間を完全に活かす事にはならない。たゞ小さな、精いつぱいの努力であり、それには万一だけが光明なのであり、要するに詮じつめれば自己滿足に過ぎない。おめでたいわけでもある。

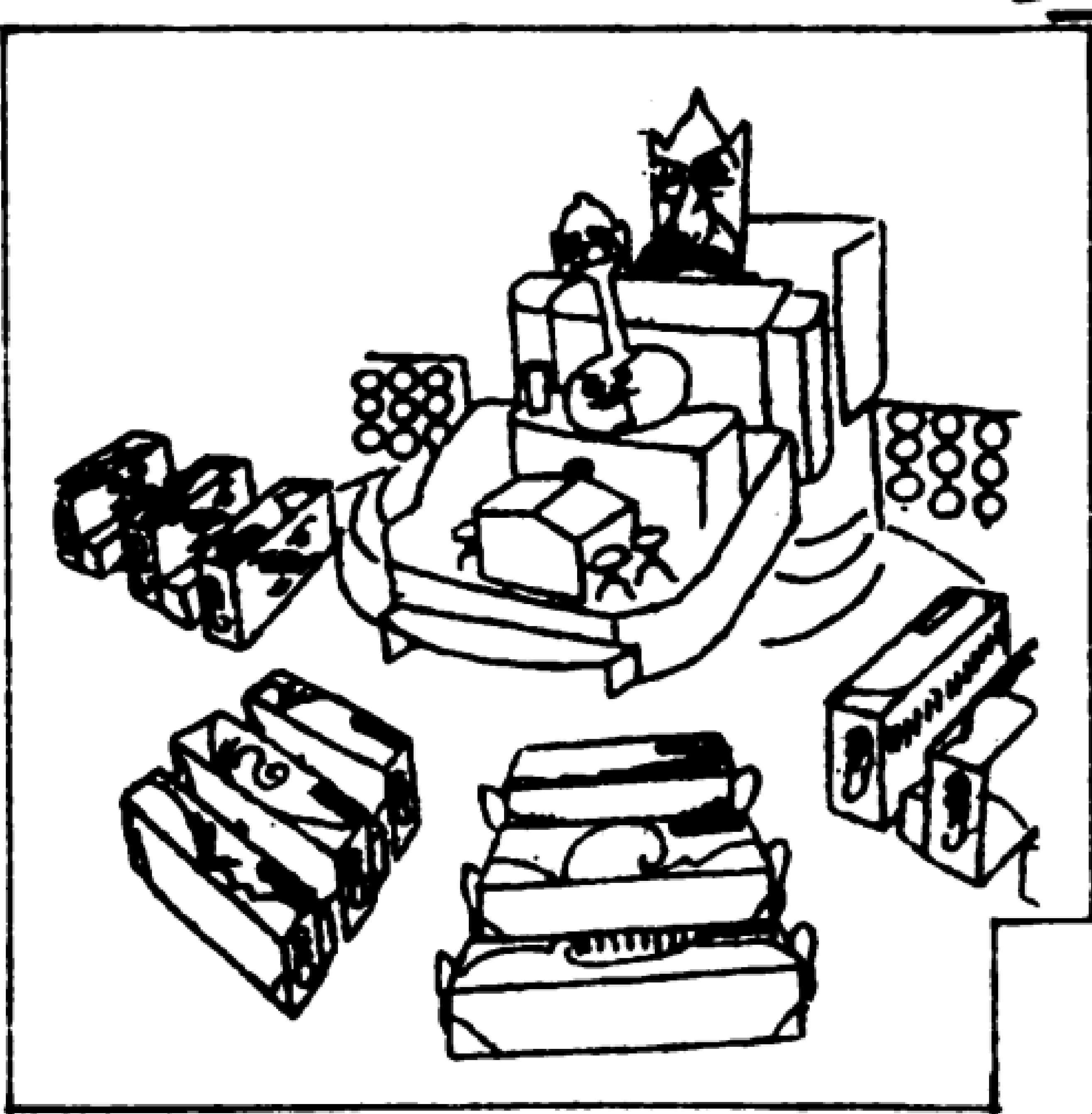
肉親に對して互に責任をもたうとする心も本能に近く見えるが、實際は從來の仕來りがそれの方が重寶だから、さうして來たに過ぎないのではないか』

その夜、私は例の緋桃の花かげにこんな事を日記にかきつけた。

（一九二六　三　二二）

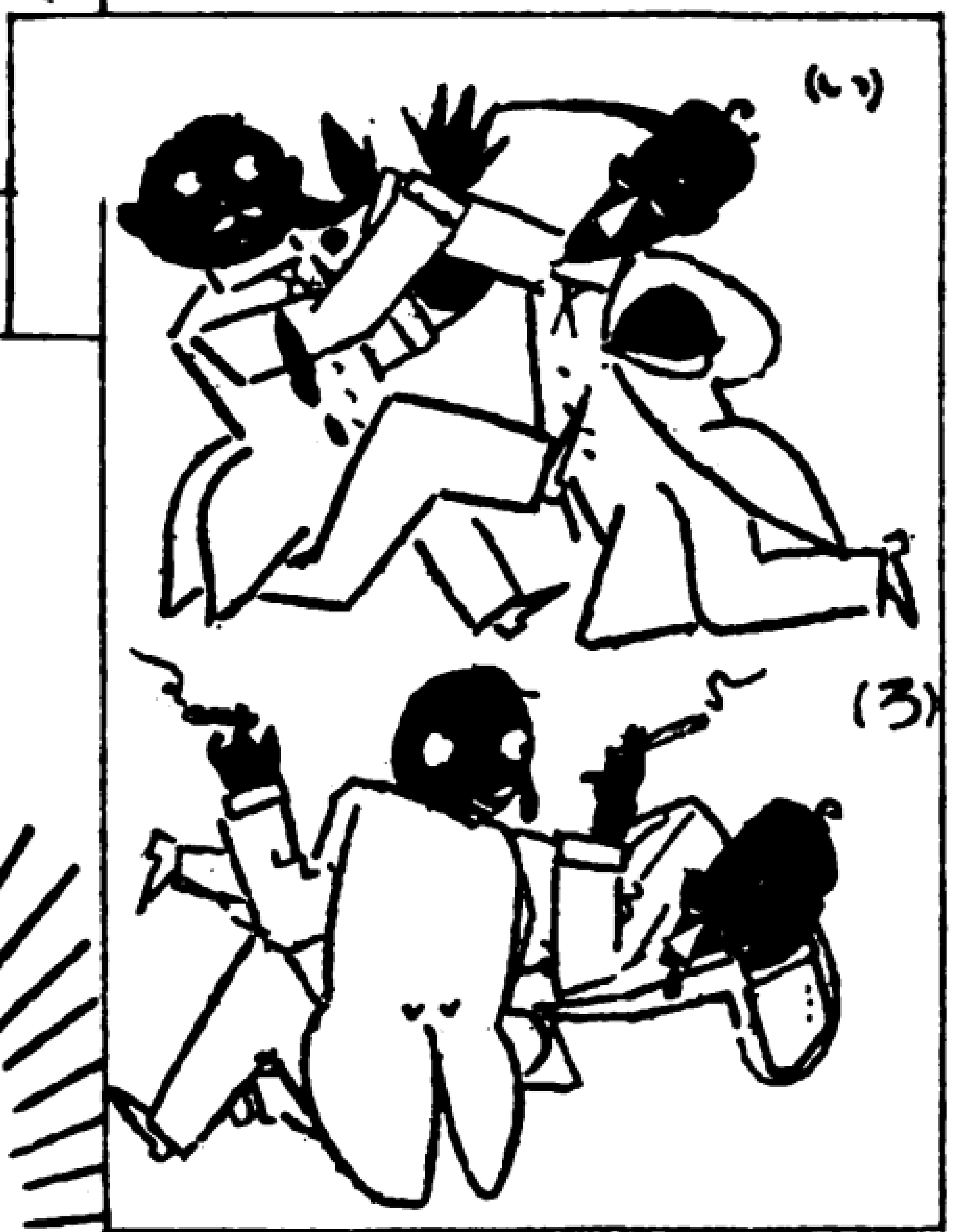
五十一議會終る

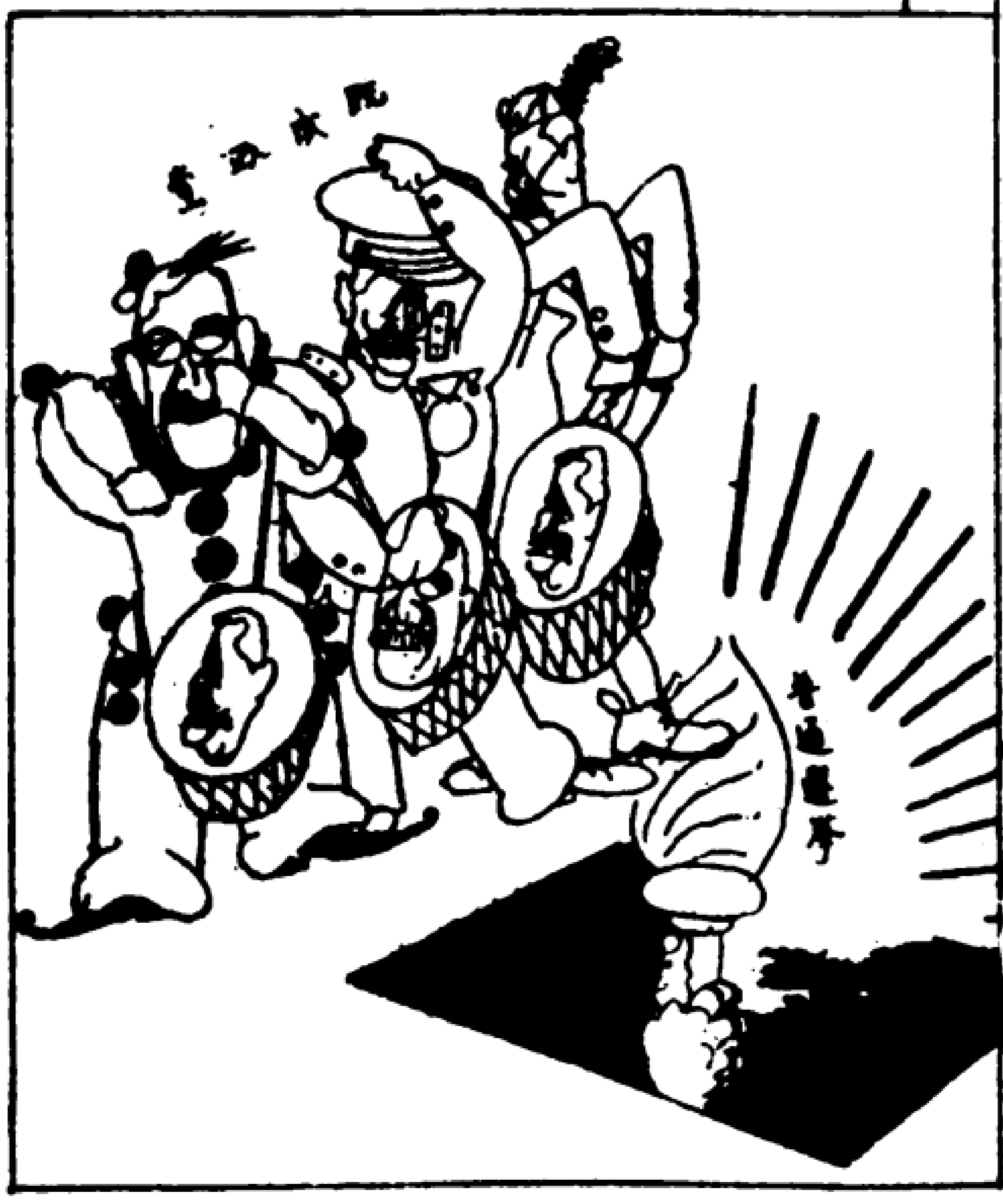
—朝日新聞紙より—



フラスコ議員の登場

議員は控室にひつこんで油を賣つてゐる。議場はいつもガラアキ





普選の呼出し曲

既成政黨の互ひにたゝき合ふこつけいなるげん骨樂によつて、次の時代の政治の主演者は、だんだんせり上つて來る。げん骨樂がはげしくなればなる程國民の期待はせり上り來る者に向ふ。

新聞紙の寸評から

○いやしくも政治家である以上いかな人格者でも國民はウッカリ信用まかりならぬ。議會近時の有様はそれをわれらに教へる

○神聖なるべき議場に流血の慘

婦人参政權運動は出直せ

『婦選なくして、何の普選ぞ』とは、婦人参政權運動者の叫びですが、まつたく、國民の半數を占めてゐる婦人のことを忘れて男子だけに政權を開放した今日の普通選擧法が正しいものでないことは、誰にもわかりきつたことでありませう。

□

婦人公論が、三月號で全國の女學校長に問合はせた婦人参政權に就いての答案をかゝげてゐますが、答へ九十九通の内九十六通までが賛成者で、絶對反對はたつた三通しかありません。而も、九十六通の内三十七通までが、今すぐ實施した方がいゝといふ意見であります。女學校の校長と云へば、古い頭の標本のやうに考へられてゐるものであるのに、なほこの通りの意見をもつ時代です。

□

私たちが大正八年に婦人の政治運動を始めてからもう八年たちますが、毎年同じやうな選ぶれの二十人たらずの婦人が、議會が始まると、思ひ出したやうに騒ぎ出す位が關の山の今の参政權運動の何とみすぼらしいことでせう。

私たちの日常生活を離れて政治はどこにもありません。市に居て、町にゐて、村にゐて、家にゐて、始終私たちは政治問題にぶつかつて居るのだけれども、それらの日常の政治問題をうちやつて、参政權運動の人たちは愚劣な今の議會を相手にしてわけもなく参政權要求と!玉と瓦のすり合ひみたいな甲斐もない骨折りをくりかへしてゐます

□

今のやうな、こんなアイノ盗かしの議會相手に、大事な私たちの参政權運動をするのは勿体ないことです。こんな腐つた政治界をたゝきつぶす運動、あんな性根の腐つた代議士共を再びえらび出さない運動に私たち女は骨を折りませう。



事を見るも國民は『とうとうやつたな』で最早不思議に思はず

○

飯が食へぬから歳費を増さうといふのなら、そんな人に飯を食つてもらはなくてもよろし。外にいくらも食ひ手がある。

○

歳費増額案は來議會にまたひとさわぎするのだそうだ。そして段々代議士といふもののハクを落して行くのだそうだ。

○

本氣になつて議會を云々することの馬鹿らしさを今年の議會で國民はつくづく見せつけさせられた。

○

泥試合に始まり、歳費増額騒ぎに終る。寧ろ終ありと謂つべしか。

うた日記

福富まさ

わが問へば人目けわしきなかにして
高き聲にて吾を叱る人

唇を閉じて默せど頭より罵詈
浴びせられ怒りに顫ゆ。

燃えさかる怒りの焔消さばやと
唇嚙みてぢつと堪ふれど。

事務室の外の廊下に蹲まり
遂に得堪えず涙に咽ぶ。



悲しさの涙にあらず口惜しき
涙にあれば嗚咽とまらず。

わが胸のひの憤りわが他の
人は知らじな吾も訴へず。

泣けばとて背に負ふ重きわが仕事
輕くもならず捗らぬのみ。

とめどなき涙に字盤を濡らしつゝ
人に强ひられ仕事を始む

人前に涙見せじと思ひしに
遂に泣きたり弱かりしわれ。

燃えたりし怒の焰おとろへて
今は不覺の涙恥じらふ

罵られ辱められせめられつ
貧しき故に堪え忍ぶわれ。

人は皆苦しきものと友言へり
苦しまんとて生れて來しか。

背に負ひし重荷の仕事爲し終えて
肩を叩きつ心輕しも。

出勤の途中電車線路に作業せる工夫を見て

廿七日

つるばしをあげつおろしつ勞働者
泥にまみれて暮らしに追はる。

面白き節にて唄ひつ働けど
工夫の顔に暗きかげあり。

わが心闇行くごとし母病めば
心を照らす光だになし。

熱のため乾ける咽喉に音たてゝ
冷めたき水を飲む病みの母。

紹介所に現はるる求職婦人

梅山一郎

婦人職業の種類が殖えると共に、都會地の實業婦人、女給や女中の増加、女工の激増等は甚しいものがあるが一体之を全國的に見てどの位の數に上るかを觀るには、昔からあつた桂庵と近時發達した公益の職業紹介所に現はるゝ求職婦人の増減を見るのが一番早い。內務省社會局の中央職業紹介事務局の全國的の調べによると、大正九年六月より大正十三年までの求人者、求職者、就職者の狀態を次のやうに知ることが出來た。

	求人者	求職婦人	就職者數	紹介所數
大正九年（六ケ月間）	一七、二八〇	五、六四一	三、四四七	七七
大正十年	五〇、五四八	一四、四二五	八、〇七七	八七
大正十一年	七二、一二六	二三、五九一	一二、二七七	一〇三
大正十二年	一四二、六一八	四六、二五一	二五、五八三	一三三
大正十三年	二〇九、四〇八	八二、七六五	四六、四八六	一六一

以上によつて見ると五年間に公益紹介所の數が二倍以上となると共に婦人を求むる雇主は約六倍の殖え方で求職婦人は八倍の激増である。困つてゐる者を救濟する機關の如く誤解されて紹介所へ出入することを潔としなかつた婦人が必要上から平氣で立つやうになつたからでもあるが、一方求職婦人が激増して來たのが何よりの原因

である。

　一方從來の口入れ業の樣子を見るのに、桂庵の數は大正十年に全國で八千六百七十九軒あつたものが大正十三年には約半分の四千九百十六軒に減つてゐる。然るに求人者求職者の數はその割合に減つてゐない。即ち大正十年より四年間の成績を見ると、

	求人者	求職婦人	就職數	營業者數
大正十年	五四四、〇三四	三一六、四四五	二〇四、二八五	八、六七九
大正十一年	五三七、九七四	三二〇、四九七	二〇六、九二〇	五、六三五
大正十二年	四八九、六九四	二九五、八五六	一八六、三二四	四、二四六
大正十三年	五〇八、〇五五	三五八、八六一	二二八、四二八	四、九一六

　求人者は少し減つてゐるが求職婦人や就職數に至つては殖えてゐる。そこで如何に求職婦人が激增しつゝあるかと云ふことが更に證明される譯である。大正十三年だけ取つて公益紹介所及營利紹介業者の手を經たものを合算すると實に婦人を求むる雇主が七十一万七千四百六十三人で、それに應じて職に就かうとした婦人が四十四万千六百二十六人、就職した者が二十六万四千九百十四人と云ふ數になる。而してこの狀態は年々に殖えつゝあると斷言し得る。

　勿論以上は全國的に求職婦人の殖えつゝある事實を差し示したに過ぎぬが、今度は都會地に特に發達した婦人の專門職業紹介所に現はるゝ婦人に就て最う少し細かな事實によつて、どんな種類の求職婦人が現はるゝかを觀察して見やう。その材料としてこゝに市の中央職業紹介所が大正十三年度に管轄內十二ケ所の紹介所で取扱ふた婦人の求人求職者の統計を籍りて見るのに、求人者は五万四千八百三十人に對して求職者は二万八百五十八人であつた。その內紹介したものが一万八千四百三十八件で無事に就職したものが一万二千五百九十七人であつた。どんな職業が多いかと云ふのに求人者が多くて求職婦人の尠ないもの〻實際數を示して觀るのに、都會地の爲か女工方面は常に求人者が多く、即ち九千七百四十一人の求人申込みに三千六百六十人しか應ずる者はなかつた。

この内でも特に多い種類は

	求人者	求職者	就職者
△装身具女工（ミシン）	二七五六	一九四一	一一二三
△嗜好品女工（製菓）	一一七一	一五六	七三
△製紙女工	六五一	一九四	一二四
△紡織女工	六〇七	九八	九二
△機械器具女工	五九〇	五九	二九
△製版印刷	五五〇	九二	八三

等である。人數は少ないが大工、左官、石工、土方等の土木建築の手傳も求人者の方が多く求職者の方が尠ない。更に商業方面では

	求人者	求職者	就職者
△小店員	一一八	四一	二五
△商店雜役	一七四	三三	二九
△飲食店雇人（女給を含む）	七〇三八	七七五	六二一
△行商	五〇〇	二八	四

以上の四種類の如きや、筋肉的方面の作業に對しては求職者は極めて尠ない。合計すると九千五百七十九人の求人に二千百八十三人の申込みに過ぎない。更にこの求人求職のバランスの取れてゐないのは戸內勞働者の女中である。

	求人者	求職者	就職者
△女中	二二九七三	七六六四	五七六五
△乳母子守	一四八二	二三八	一八六
△書生給仕	四三二	二五五	一六七
△番人小使	一九〇	一三七	六八

で戸內使用人を綜合すると二万五千六百九十一人の求人者に對して八千五百七十六人の求職者と云ふ比例である。其の他紹介所に現はるゝ內求職婦人の不足する方のものを擧げれば

	求人者	求職者	就職者
△看護人	一四七七	六一二	二八六
△醫師	一五	五	一

△薬局員	二四五	一三四	六三
△外交集金人	二九〇九	八〇	六八
△配達人	四六	三	一
△理髪業	二三五	二八	一七
△娯楽場雇人	二一六一	五〇	三二

等がある。かう見て來ると何れも求人者の方が多い。

之と反對に求職婦人の多いものが二三種ある。卽ち女店員と事務員と家庭敎師である。

	求人者	求職者	就職者
△事務員	三〇六五	四六四八	二〇〇〇
△店員	一一六五	一三〇〇	五八六
△家庭敎師	三二	三九	一七

の數字によつて能く判るであらう。かうした需給關係の過不足がここ五六年繰返されてゐる。これは著しく眼立つた婦人の紹介狀況とも云ふ可きものである。

次に此等の紹介所に現はるゝ婦人の年齢學歷、府縣別を見るのに、年齢では市の水道橋婦人職業紹介所の大正十四年一月より三月までの求職婦人四千二百一人の調べによれば

△十二歳未滿	五人
△十二歳以上十三歳迄	六人
△十四歳	十九人
△十五歳	三十二人
△十六歳	二百四十二人
△十八歳まで	七百〇八人
△二十歳まで	千八百四十四人
以上合計	二千八百五十六人
△二十五歳まで	五百五十七人
△三十歳まで	二百三十二人
△四十歳まで	三百〇九人
△五十歳まで	二百四十七人
合　計	千三百四十五人

之によつて見ると六割六分は二十歳前で一割二分が二十五歳で他は二割二分に過ぎない。殆ど大部分が未婚の

若い娘達である。學歴は

△專門學校	一人（半途）	二九人	四〇人
△高等女學校	五九〇人（半途）	二五六人	八四六人
△中等學校	二五六人（半途）	一九二人	四四八人
△高等小學校	一三九五人（半途）	一六四人	一四五九人
△尋常小學校	一三〇七人（半途）	二九九人	一五〇六人
△多少文字を解す	一三八人		
△文字なき者	一六四人		

等で約女學校以上と高等小學卒業と尋常小學卒業とが殆ど同率である。出身府縣別は全國に跨がつてゐる。

東京……一二三八	千葉……三二九	茨城……二七三
新潟……二四一	栃木……一八三	神奈川……一七八
埼玉……一七四	長野……一四五	福島……一二九
北海道……九九	山形……九八	群馬……九四
宮城……八五	山梨……七〇	富山……六七
福島……六七	福岡……六八	鹿兒島……五七
大阪……四九	愛知……六〇	福井……四五
愛媛……四三	岩手……四六	岡山……四〇
熊本……三九	山口……四四	三重……三四
佐賀……三二	石川……三三	岐阜……二九
長崎……二七	京都……三五	滋賀……二三
香川……二一	高知……二四	青森……一七
鳥取……一六	島根……一六	大分……一三
宮崎……一三	和歌山……一九	沖繩……五
朝鮮……二	德島……八	

東京の紹介所に現はるる婦人の七割四分は地方出の婦人で生えぬきの東京婦人は二割六分に過ぎない。



春宵雜記

奥榮一



猫やなぎ

引越して間もない事、私は垣根の外に三四本竝んでゐる背の低い、細長い黄つぽい葉をつけた木を指して、遊びに來た友達にその名を尋ねた。

『夾竹桃だらう』

友達はさう答へた。

夾竹桃の木葉は一日一日と散つて行つた。私は丁度その時分から、病を得て、蝸牛のやうに床の中にくるまつてしまつた。

その間に挾竹桃は青白い小さな芽を吹きだして、その芽がだんだんと大きくなつて、銀色の毛につゝまれた小さな玉が枝一面になつた。

『何だ猫柳か』

私は床の中で一人で苦笑した。が私はまるで久しぶりに舊友にでも會つたやうに、氣持のいゝ日は寢床の中から、時にはわざわざ緣側に出て、その銀色の花を眺めた。

七つになつた長男の京一は私から敎へられたまゝに、『猫の木、猫の木』と呼んで、私達の小さな庭を賑きはしてくれるこの唯一の花を、私と同じやうに悅んだ。

その中にその銀色の花は次第にその光を失つて、黃つぽく澁れて、その後から綠の細長い柔い葉が延び始めた。

いつの間にか私の病床にも春が訪れたのである。

それにしても、あのありふれた猫柳があんなに私達親子を饒はせたことを思ふと、私も七つの子と同じやうに、始めて、この年になつて猫の木を知つたのだとつくづく思つた。

小鳥の死

年が明けて未だ間もない頃、ある寒い夕方私の家の中へ一匹の小鳥が飛び込んで來た。それは文鳥によく似たが文鳥よりも何處となく白つぽい、それにあの濃い紺色の更りに、灰渇色の未だ何處となく雛らしい小鳥だつた。

小供達の嬉ぶまゝに、その夜は有合はせのざるに伏せて置いて、明くる朝私は何日ぶりかで外に出て鳥籠を買つて來た。

試みに栗をかつて來て食べさすと元氣よく食べた。が何處かで何うにかしたと見えて、尻尾の毛が半分拔けて、まつちの棒のやうに、羽根の筋だけつきたじてゐるのが變にいたいたしかつた。

小供達ちはうちのチユチユと云つて、近處の子供を集めて來ては自慢さうに見せてゐた。

私は身體の加減のいゝ日は自分で餌をやつたり水をやつたり、暖い日向に籠を釣したりするのを日課にしてゐた。

小鳥は雀のやうな聲で、チユチユと鳴いたり、時には囁くやうな低い別の聲で囀つたりした。

次第に寒くなるにつけて、私は寒い風にあてまいと、夜になると家の中をあつちこつち撰んでは持ち廻つた。

そんな風にして、その名も知らない小鳥は私達の、とりわけて二人の幼けない子供と私の親しい友達になつたのであつた。がてれも永い事ではなかつた、二十日余りたつた或朝、私は何時ものやうに餌をやらうと鳥籠を覗くと、あの傷いた方の尻尾の先から眞赤ら血をたらして霧のやうなその繁吹か籠を染め、二尺余りも隔つた壁にまで飛んでゐるのを發見して、私は驚いた。予め用心してゐた場所ではあつたが私は、若しや鼠でも、と思つてはつとした。でもそつと日向に出して置いたら、思ひの外に元氣になつて、何日ものやうに鳴いてゐた。

その夜から又籠の場所をかへた。

明くる日も矢張少し血をたらしてゐたが、もう平日のやうに元氣なのが、私と子供を悦ばせた。

『もう大丈夫だ』

私は重大な事かなんぞのやうに家内に話しかけた。

その次の晩、變に羽撃きの音がしたので、私は起きて見た、小鳥は靜かに止り木の上で眠つてゐた。

が私達の小鳥はその明くる朝、水飲の中に小さな頭を力なく突込んだまゝ死んでゐた。

私はその憐れな姿を見ると、そのまゝ床の中にもぐり

込んでしまつた。
　私は一匹の小鳥の死とも思はれないやうな淋しい憂鬱な氣持になつた。さうしてそれと同時に、ろくに飼ひ方も知らないで飼つてゐた自分達の飼ひ方に間違ひがあつたのではないかと云ふやうな自責の氣持さへ烈しく動いてゐた。
『おい鳥が死んだ、庭の隅へ埋めてやつてくれ』
　私は不氣嫌な聲で怒鳴つた。
　暫くすると、二三人の子供が小鳥を庭に埋めてゐるらしい子供達の騷ぎ聲が聞えた。
　私は子供がどんな事をするか云とふことが氣になりだした。さうして又床を運ひ出して庭に出た。
『京一、チュチュを何處へ埋めたんだ』
　私は子供に尋ねた
『こゝへ僕と龜雄さんと埋めたんだ』
　子供は庭隅を指した。
　其處には黒い土が小さく盛り上つて、その上に四五枚葉のついた垣根の小さな柴の枝が立てられてゐた。
『これだれがやつたんだい』
　私がこう尋ねると、
『僕かやつたの』
『ひとりで、誰にも聞かないで』
『うん』
　私は自慢さうにこう云つて私の顔を見上げたいたいけな我が子の顔と小鳥の墓を見比べて、變に涙ぐましい氣持になつた。
『さあチュチュに水をやらう』
　私は手杓に一ぱい水を汲んで來て、小供とかはるがはる小鳥の墓に注いだ。

飛行機

　或日の暮方私は子供の手を引いて街の通りを散邦してゐた。と突然けたたましい響をたてゝ、暮の空を飛行機が飛んで來た。
『お父ちやん、飛行機が來た、あらあそこに二匹飛んで來たよ』
　と子供は街の眞中に佇んで大きな聲で私に話しかけた。私も、傍を通つてゐる人も思はず、笑ひだした。が私はすぐ、その笑ひの底に、たゞ單に小供のかたことして笑ふだけで濟まされないやうな暗示的な何物かを考へさされた。

さくら

人込の中へ行く程未だ健康のすぐれない私は、小供の手を引いて花見時のある日、我家の近くの櫻の花の咲いたある大きな屋敷の傍を歩いてゐた。

『巣鴨のうちにもあんな花があつたね、もせん針に糸をつけて、あんな花をたくさんさしたね。』

子供は私に話しかけた。

『坊やはよく覺えてゐるのねえ』

私はこう答へながら、生れて七年、我家といふものを持たないこの子は幾度遂つた家で春を向へたであらう、私は暗然として。子供の頭を輕くなでた。

風の吹く夜

郊外の野原の一角に建てられた粗末な借家は今にも吹き飛ばされさうにひどい勢で風が吹く。

『ひどい風だ、まるで嵐の晩に船に乘つてゐるやうだ』

『もうこれで今年の櫻もだめでせうね』

『とうとう今年も御花見をする折がなかつたなあ』

『雨戸がはづれやしないか知らん』

妻と私かこうした話をしてゐる傍で、難波船のやうに揺れてゐる家の中で、二人の幼けない子供は、樂らかに靜かに眠つてゐる。

春のうた

ひふみ
いとけなき子と春の日に
窓にならべぬ草花の鉢

げに春よ
いとけなき子と二人して
借家の隅に作る花園

指して子は悦びぬ花畑
隣りの庭に
春はおとづる

こつそりと行きて眺めぬ
すみなれて、追はれし家の
庭の櫻を

エリスの「男と女」

わかくさ

ハヴロック、エリスは、その著『男子と女子』の序の中で次のやうに云つてゐる。

『此の書の主要な目的は、男と女といふ性的の相手が、どの點まで人爲的――即ち、傳説や、境遇の結果であるか、又どの點まで男と女といふ有機体の實際の構造にまで根底を持つたものであるか、その點を考へてみたいといふことにある』云々と。

エリスは醫者であつたから、この點、男女の性的相違を、主として實驗心理の上から研究して行つたのである。

次に掲げるのは、その中から抜いたものである。

× × × × ×

普通に、頭蓋骨の大きさで、男女に優劣があるといふ結論をなされてゐるが、これは何ら確かな根底があるのでない。

ヨーロッパ人に於ては、女よりも男の腦が大きいことは確かだ。腦量と身長との割合をとつてみても、男の方が大分女よりも大きな頭腦をもつてゐることになる。然し、体重と腦量との割合からみると、女の方が男よりも大きい腦を持つてゐることになるのである。こんなことで、その價値を甲乙するといふことは不確かなものであらう。

例へば、記錄に殘つてゐる六個の最大腦に就いてみて

も、第一のものは平凡な人の腦で、第二のは痴愚者、第三が文豪ツルゲネーフ、第四は平凡な勞働者、第五が煉瓦職人、第六は、特別な能力を持つてゐたけれど、試驗に落第して自殺した女醫學生であつた、といふことである。

女子の職業的才能に就いて――種々な職業が、次第に女子のためにその門戸を開いたのは、男女の能力を比較する機會を多くしたが、嚴密に云へば、男女の間にはいろいろ分業が行はれてゐるから、同一の條件の下に同一の仕事をしてみない以上、この比較は冒險である。

トウロネーは、幾人かの商人に、工場で働いてゐる男女の執務振りの相違をたづねたところ、女は、男よりも勤勉ではあるが、頭は劣つてゐる、といふのが大体の意見であつた。

例へば、印刷工場に就いて調べてみると、女は機械的に細かいところによく注意を拂つてゆくけれども、自分のやつてゐる仕事に充分の理解を持つことが出來ない。それ故、植字をやるにしても、印刷物をみてする場合には非常にうまいが、直接原稿からやる場合には、男ほどに行かない。

シドニー・ウエッブの云ふ所によれば、プルリデンチイアル生命保險會社では、二百人以上の女事務員が雇はれてゐるが、その仕事は手紙をうつしたり、一定の證書に文字を書き入れたりすることである。仕事の點では、確かに男よりも早くて、巧いが、ほんの一寸した病氣で休むことが多い。

イギリスに於ける幾くつかの郵便局で働いてゐる男女の事務員について調べたところに依ると、計算臺や機械室に於いて、爲替や貯金事務、電話の受送などする點では女の方が遙かに男より優つてゐる。タイプの手入、金錢上の注意、一般の注意、忍耐深い點から云つても、男より勝つてゐる。

又ある地方の大きな郵便局の經驗では、電信技手としても、その他知能を働かせる點に於ても、正確にやる點に於ても、男と同等である。たゞ字を書く點では、男ほどうまくない。概して郵便局の事務員としては、女は男に少しも遜色がないやうであるが、非常に忙しい時になると、骨の折れる仕事は男に及ばない。

又、一般的な知識を要する新聞電報などの場合には、男に劣つてゐる。或人の意見に依ると、監督者としては女は不適當である。監督者は、機械室の中をたえず歩いてゐねばならぬが、これは女には困難である。その上技術上の知識をえやうとする要求を示さない、といふことである。

次に、女性と政治に就いては、六十年餘り以前に、ブルダツハが、女は男よりも政治に適してゐると云つて、立派な女王の名を澤山擧げてゐた。それからずつと後にジョン・スチュアート・ミルもその著『婦人と隷屬』の中で同じやうな事を云つてゐる。世界のあらゆる人種、凡ゆる國を通じて、女性は最も獰猛な、最も厄介な種族をさへ見事に支配した。又、多くの原始民族の間でも、他の種族との外交はみな女性の手でなされてゐる。時には、媾和や、宣戰のやうな事さへ女性がした。

政治といふものは、これに關係する人々をして、女性的性質を發達させるものと見える。だから老ブルダツハの云つたやうに、女が政治に適することは、決して怪しむべきことぢやない。充分に教育を與へて、センチメンタルや幻想から脱するやうに教育をしさへしたら、女も政治上の實際問題を取扱ふ上に男と同等の力量を發揮するにちがひない。

男女が、外界の事情の如何に拘らず、その本質的、重要な特徴は何であるかといふことを決めることは出來ない。我々が語りうることは、現在の文明の狀態で、男と女とがどんなものであるか、周圍の事情によつて、或範

圍に於て、男女が如何に變化して行くかと云ふ事だけである。從つて男と女とそれぞれの活動の範圍などを限定する事は不可能である。

たゞ、われわれが人間を心理的生理的に研究してみて度々現れる一般的な結論は、男は、女よりも變化性に富んでゐるといふことと、そして女は、男よりも早熟であるといふことと、この二つである。從つて、女は兒童と男の中間にあるものだと一般に云はれてゐる。病氣に就いてみても、子供と女に共通な病氣が多い。

併し、スペンサーなどが、女は發達しない男だと云つてゐるのは間違つてゐる。人類猿に於ては、子猿が、大人猿よりはずつと人間に近い。これは進化の度程に於て子猿の方が大人猿に勝つてをり、又、雌猿は、子猿に近いだけ、雄猿よりも勝つてゐるといふことを意味するものである。

人間の進化は大人の猿から出發したものではなくて、子猿及び雌猿より出發したものである。人間の將來の進化に關して、人間の幼兒が持つてゐる關係と、猿の幼兒がその未來に對して持つてゐる關係と同樣である。

最高の人間の型は天才に依つて代表されるが、それは子供に近い型である。われわれが最もすぐれた人間の型と云つてゐるギリシヤ人の型は、『いつまでも、子供である』と云はれた型である。

進化に對する子供の位置は、同時に女の位置である。ブルダツハは、女は、男よりも一層高い人間としての型をもつてゐる。毛の少ないだけでも進化してゐる、と云つてゐる。だから、文明國の男を見よ、野蠻國の女よりもずつと女に近くなつてゐる。

單に腦が大きいばかりでなく、骨盤がだんだん大きくなつて來る點から云つても、近代の男は女に導かれてゐる。近代の女の頭蓋骨及び骨盤は昔の女よりもずつと女性的であるが、近代の男の骨盤も、徐々に、多く女性的になつて行つてゐる。

多くの學者が認めてゐるやうに、學者は、生理的にも、心理的にも、女と、一般の男との中間にある。 近代の男は、この學者の型に近づきつゝあるのだ。

モルガンは希臘、羅馬の衰亡は、女を發達させなかつたからだと云つてゐるが、併し、女性は之を全然變形させなければ、其文明に調和する事が出來なかつたのである。 基督教と未開人とが其時に現はれて來て、女性的要素がその位置を得ると共に、それ等の古代文明は亡びて同時に長い間の男性的要素が一度亡びて行つた。

將來の社會に對する希望は、男性的要素と、女性的要素を共に發達させることである。 近代文明の廣い變化に富んだ性質は、古代文明よりも、より多く此點で可能であらう。

我々社會の事柄に對しては、何等人爲的の區別を兩性の間に齎し得る理由を持たない。

男と女が、それぞれ如何なる仕事に適するかと云ふ事は、實際の經驗以外に確められないことである。 それとともに、全く同一の事情が再び繰返されないから決定した斷言は出來ない。 たゞ、そうした試みが成功すれば、それだけ人類が幸福である。 それが不成功に終れば、自然の法を破つたものが苦しむだけである。 自然の法則が打ち毀されやしないか、と案じるのは杞憂である。 世界は、それ程不安定のものではない。 吾々は平然と、其の再調整を見ていればいい。 その再調整が、健全な自然の意志の表はれであれば、社會は高められ、廣められるであらうし、若しさうでなければ、人類の根底に觸れないで終つて了うであらうまでである。

搾取されつ、

成田美子



私の弟は、毎日毎日どんな日でも勞働者と一緒にくらしてゐる。道路工事の監督ですから。そして實際の有様をはじめてしみじみと知つた。

勞働者の出ない中に朝は出かけて、今日の仕事の配ばりをしなければならないから、朝はどうしても五時に起きる。御飯を食べさせるためには、私どもは四時一寸すぎには目ざましの音でムツクと起きねばならない。

電車で、一時間は行かねばならないから、その時間にはぐれぬやうにせき立てて、食後の湯も、玄關までもち出して靴をはく間にさますといふ仕末である。

監督である弟は、勞働者の出る前に出勤するのであるが、勞働者の方では、時間が一寸でもおくれたら其日の仕事にはありつけぬ。

それは、それぞれの土方だちのオヤ分がやるんださうである。しかし一日、一時間でもゆるされずにはねつけられた勞働者は、一日の賃金をとることが出來ぬ。どう暮すのだらう？

その家庭は？　その人々は？

歸へりはといふと、すつかり日が暮れて七時か八時が普通、（監督であるから、勞働者の退けたあとに歸宅するのではあるが）工事が一定の期限であるし、人は一定の人數である、といふわけだから、雨の日がよけいつゞくと馬力をかけて夜業をつゞける。

夜業！　まで。

時と、金、とが人間を、かなしばりにしてあるから、人をやたらとつかはなければならぬ。そこで期限におくれると罰金がある。弟はあせる風です。むつかしい顏で歸へる時は、豫定の仕事の進歩がうまく行かない時。

そうして何日も何日も忙しいと、

もうベツトリ疲勞しきつて歸つて來て、御飯を食べると、そこにゴロリとねたまゝになるほど、疲勞してゐる。

それ位ならまだいゝ、神經衰弱疾みたいになつてなかなか安眠出來ないので、酒をあほつて、そしてその勢ひで、マスイの狀態で安眠をとるといつた風。

湯に入ると、自分で自分のからだを拭ふことが出來ぬ位へトヘトになつてゐる。頑固な、つよい体格をもつてゐる弟が、こんなに疲勞するのを、上京して今度初めて目ゲキして全く可哀想になつて了つた。

そして、必ず工事のせはしい疲勞の極度のたびごとに、妻にあたり散らして喰つてかゝる。必ず工事のために、勞働のはげしいために、一寸のことで（根もないことで）ケンカになる。一体誰の罪か？ 私は痛切に考へる。

そして、この弟の下に使はれてる勞働者に、とても同情せずにおけない。勞働者は、しかも賃金は安い、人は余つてゐるのだからいくらでも安いものを使はれるし、そしてこの勞働時間と、その骨折り、而も、定期までの工事のためにせかれせかれてやつてる勞働者たち！

弟もむごいが、弟の下に使はる者、勞働者はなほむごい。けれども定期までどうしてもやらねば××××會社のためではないのである。そしてこの入札の請負事業の××××會社の下につかはるゝ人間全部がむごたらしい有樣である！ 入札の安い方へ安い方へと選んでやらせて、その余りの金はどこへ行くのだらう。

こんなにヘトヘトにこき使はれ、こき使つてくれる、××××會社のお手の中にあるうまい金、――その金が、こんなにくるしめて期定の時に定人でやる仕事、

私は何んだか哀れんでいゝやら何といつていゝかわからない。

あとでは、弟が馬鹿のやうにも思ふ氣がしてならない。いくら好きな仕事だつて、こんなにまで、まるで家庭に歸へるのはねむりに歸へるばかりぢやないか。

× ×

勞働者はその上に生活に不安があるんだもの、一体どんな風であらうと思はれてならない。

此間、とうとう自動車で右足をやられて、まだ片足はゾーリで、片足靴で歩いて通つてる。それだのに、どうした、××××會社の重役どもは？ みたまゝで會社の自動車で通はしてもいい位の大事な人間をだまつてみてゐるのだ。

私はとてもたまらなくなつてしか

たがなかつた。使ふ時はさんざん使つて、いざ工事のため、會社のためにカタワものになれば、おさらば位にあつかふ。

勞働者。おしてしるべし。

弟は言ふ。

勞働者が酒をのまねばならぬ理由は、わかつてると。

そうだあしたの仕事の睡眠をとるために、疲れた神經を馬鹿にして、マヒさせる外ないのだ。勞働者のかみさんたちは、わづかの賃金のうち亭主にのまれて歸へられて、殘りの金を與へられる。そしてケンカをするんだらう。つかれて歸へつて、ケンカをして、子供もなかせ、かみさんもなき、それに、かみさんも同じく勞働者であるだらう。

みんな悲慘なうき目をして暮して何のたのしみも家の中になく、つかれ切つたからだをやすめるだけならいい、やすめる心よい時間もないのだ。安眠の時間もたりないのだ。

勞働者のかみさんに、それに乳呑子でもあつてみろ、夜はギヤギヤなかれ、朝は早くおき、ひるは出て働かねばならず。夜はおそいし、そし

食ふや食はずで、あたりに借金しいしいくるしんでゐるんだよ。

そして自分も、つかれてケガをするんだよ。

ケガをすれば、おさらばなんだよ。

メーデーを祝ふ歌

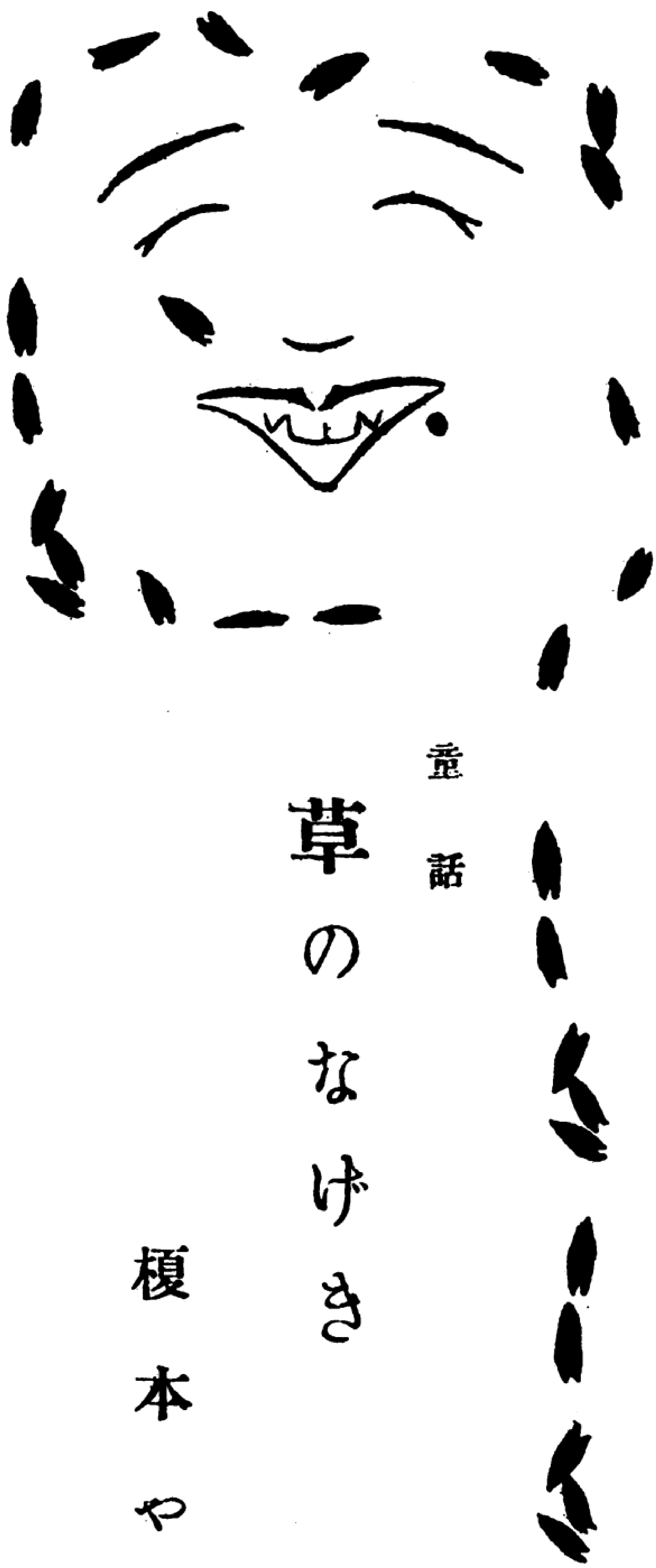
一　聞け萬國の勞働者轟き渡るメーデーの　示威者に起る足どりと未來を告ぐる鬨の聲

二　汝の部署を放棄せよ汝の價値に眠醒むべし　全一日の休業は社會の虛僞を打つものぞ

三　永き搾取に惱みたる無產の民よ蹶起せよ　今や二十四時間の階級戰は來りたり

四　起て勞働者振ひ起て奪ひ去られし生產を　正義の手もとに取り返せ彼等の力何ものぞ

五　我等が步武の先頭に掲げられたる自由旗を　守れメーデー勞働者守れメーデー勞働者



童話

草のなげき

榎本やそ子

夕方のある廣い街道の一隅に起つたお話でございます。

朝から一日、轟々と物凄い音を立て丶風が吹き荒れました。

今まで、春先きのぼかぼかとした柔いお陽様に照らされて、何の不自由もなくすくすくと育つて來た路端の雑草は、この突然の暴風に、みんな小さくなつて首を縮めたり、じつと土にかじりついたりして息を殺してゐました。

ざわざわと四邊りの大きな樹の梢をゆするたんぴに樫や欅の青葉がからからとなき乍ら、ちぎられた体を雑草の上へ轉がして行きました。

もう風が止むか、もう風が止むか、そうつと小さな首を擡げた一本の草は、どうつと勢よく吹いて來た風に一溜りもなく吹き卷くられて、無慘にも横倒しに崩れてしまひました。

何處かで、誰かゞすすりなきをしてゐました。すると、今まで、自分は風なんかに負けて堪るものかと肩をいからしてつんと突立つてゐたたんぽゝが、

『もしもし泣いてゐるのは誰ですか』と、ひよろ長い首を伸ばして、よろよろしながら四邊りに向つて聞きました。その聲を聞くと、今度はあちらからもこちらからも、堪へてゐた忍び泣きが聞へ出しました。

『皆さん、急にそう弱虫になつてはいけません。わたし達は出來るだけこの風と戰はねばならないのです。風の止むまで、も少しの辛抱です』

たんぽゝは、みなを勵ますやうに大きな聲で叫びました。

風が又、どつと吹きまくつて來たので、泣いてゐた草達は息をひそめて地面に縋りつきました。身を引き千切られるやうな恐ろしいうなり聲と共に、ごうつと風が通り過ぎてしまふと、みなは又恐る恐る首を上げました。

『たんぽゝさん、どうして風はこんなに弱いわたし達を意地目るのでせう、わたしはもう口惜しくて、口惜しくて……』と、豆粒の樣な紫の花が云ひました。

『紫の花さん、風は決してわたし達を意地目やうとして吹き荒れてゐるのではありませんよ。矢つ張り時節によつて、風は風の役目を果してゐるのですもの、わたし達が意氣地がないからこんな風に負かされるのです。强くなるやうに、お互にしつかり大地を踏みしめてゐるやうじやありませんか』

たんぽゝはいかにも自分は强くなつて見せるといふやうに、聲に力を入れて云ひ切りましたが、ふと見ると、哀れにも紫の花は戰ひ疲れて、ほろほろ泣き乍ら散つてゐました。

地を這つてゐるある蔓草の上には、その紫の花が一杯に亂れ散つてゐました。紫の花の傍には、蒼白い顔をしたぺんぺん草が、ゆらゆらと半病人のやうに疲れ切つた体を震はしてゐます。何處からか、氣の狂つた櫻の葉が、たんぽゝの頭と云はず、ぺんぺん草の横腹と云はず、何處でも構はずに打つかり方題打つかつて又何處とも知れず吹き流されて行きました。

そうした葉の群れや、埃が遠慮なくさまよふて行く有様を泣き腫らした眼で見送る草達は、自分達も終ひにはあんな氣狂ひになつてしまふのだらうと思ひました。

強いことを云つてみなを勵ましてゐるたんぽゝが、じつと唇を噛みしめて立つてゐる後の方で、誰かゞひそひそ囁いてゐます。たんぽゝが振り返つて見ると、少し離れたところの蓬の葉蔭で、空色をした細い細い花が、傍の草と何か話をしてゐるのでした。

『ねえ、隨分いゝわね、すみれさんのやうに、ああ大事にされれば、ちつとも風なんか怖いことないは、そりや樂なものよ』

『まつたくだね、それですみれさんは意張つてゐるんだね、何處が風が吹くかつてやうな顔をして笑つてゐるよ』

『本當よ、すみれさんだつて、あの蕗さんがゐなけりや滅茶滅茶になるのよ、美しいものは得だわ』

空色をした花と、外の草とは出來るだけ聲をひそめて話をし合つてゐました。

默つてその話を聞いてゐたたんぽゝは、噂の主のすみれが何處にゐるかと、後の方から前の方へとくるりと体を向けて、ぐつと首を伸ばして見ますと、一間許り距れたところに、にこにこと、いかにものんきさうなすみれの美しい笑顔が、大きな蕗の葉の間から見へました。たつた二つの蕗の葉でしたが、小さい草達にとつては到底寄りつけさうにもない立派な御殿でしたたんぽゝはそれを見ると、ははあなる程なと、一人

で感心しました。
『もしもし空色の花さん、聞いてゐるとあなた方はしきりに、すみれさんのことを云つておいでだが、すみれさんはすみれさんの運がいいのですから、そう羨やむものじやないでせう』
『あら、誰かと思つたらたんぽゝさん、いいえわたし達は何もすみれさんを羨やましがつてゐるわけじやありませんのよ、たゞね、わたし達はこんな風のためにひどい目に逢つてゐるのに、すみれさんは、一人で樂して、みんなの苦るしむのを笑ふなんて公平でないと云つたのですわ。ね、かたばみさん』
『そうですよ、運がよければよいやうに、少しは僕達に同情して呉れてもいいと思ふ。』
かたばみは空色の花のいふ事に相槌を打ちました。そして、三つに割れた葉と葉の間から、黄いろい花の目に涙を浮べて、訴へるやうにたんぽゝを見上げました。たんぽゝはこくりと一つ大きく首を振つて、
『さやう、そう云へば、すみれさんは自分の身分をかさに、他人の苦るしみをよそ目に笑ふなんて怪しからんことです。だがねみなさん、無暗にすみれさんを憎んだり羨やんだりするのは、愚な事です。すみれさんは、まだ無自覺で、世間を知らない幸福ものだと思へば、何とも思ふ事はいらないのです。すみれさんは、わたし達の眼から見ると本當に幸福のやうだが、先き先きの事は解りませんもの。人の身分より自分が大切です。ねみなさん、もつと偉きな力を出さうではありませんか』
たんぽゝは誰に向つてもはきはきと力強く云ひ放ちましたが、かたばみは矢つ張り力無げに、
『だつてたんぽゝさんはそう仰しやるけれど、僕達は强くならふつたつてなれません。今日のやうにこんな非道い風には吹き卷くられるし、刖にはやたらに頭から踏み躁られたりして、少しも安心してゐられやしない。僕達が少し世間が解りかけて來ると、かうして

いろいろの苦るしい障害が湧いて來て、一生、立つ瀬もなく枯れてしまふんですもの』

『全くかたばみさんの云ふ通りよ、たんぽゝさんなどは、之から先き年をお取りになつても、こんな風の吹く日はどんどん外へ飛んで行つて自由にお暮しになれますけれど、わたし達ときたら踏まれて、枯れてゆく悲しい身の上なのですわ』

　空色の花はさめざめと泣き入ると、之も亦ほろつ、ほろつと身を散らしてしまひました。

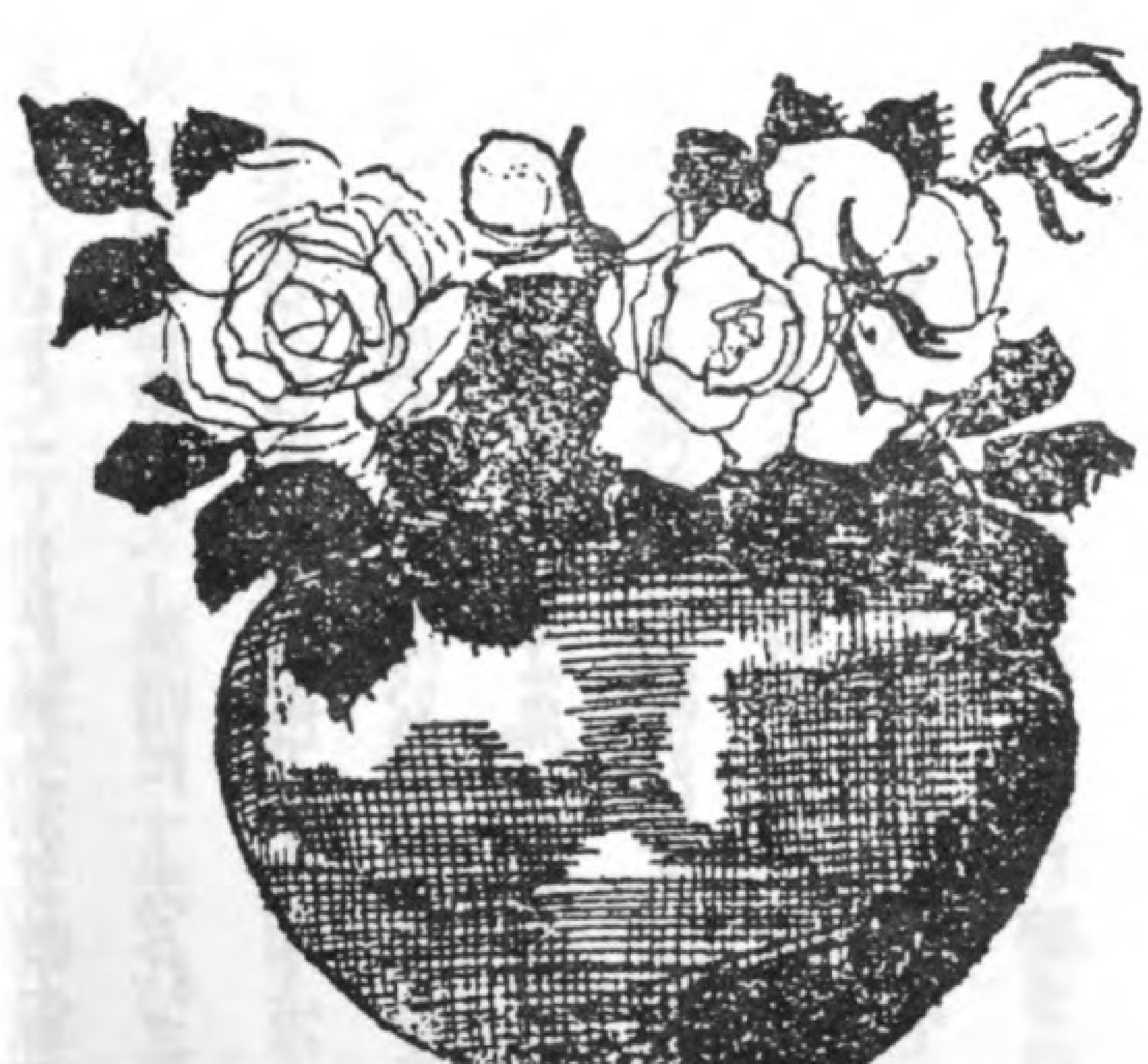
　たんぽゝは、自分の外に、まだまだこんなにも弱い哀れな力の足りないものが澤山あるかと思ふと、流石にさびしく思ひました。

　今はもう、一刻も早くこの風だけでも止んで、草達が安心して眠れるやうにと、一心に祈りました。

　風が強く烈しいために、いつもの露は一滴も降りて來ません。ただお星樣が、きらつきらつと空高く輝いてゐる許りですが、誰も上を見上げるものはありません。

　たんぽゝの深い溜息の後から、紫や空色の花は、言葉もなくほろつほろつと散つて行きました。いつになつたら風は止んで吳れるのでせうか。

（終り）



大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
大正十五年四月二十七日 印刷納本
大正十五年五月一日發行（毎月一回一日發行）



婦人運動 第四卷 第四號
【定價二十五錢】